

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak  
LICENSED PRODUCT

3/Color  
Black

Blue

Cyan

Green

Yellow

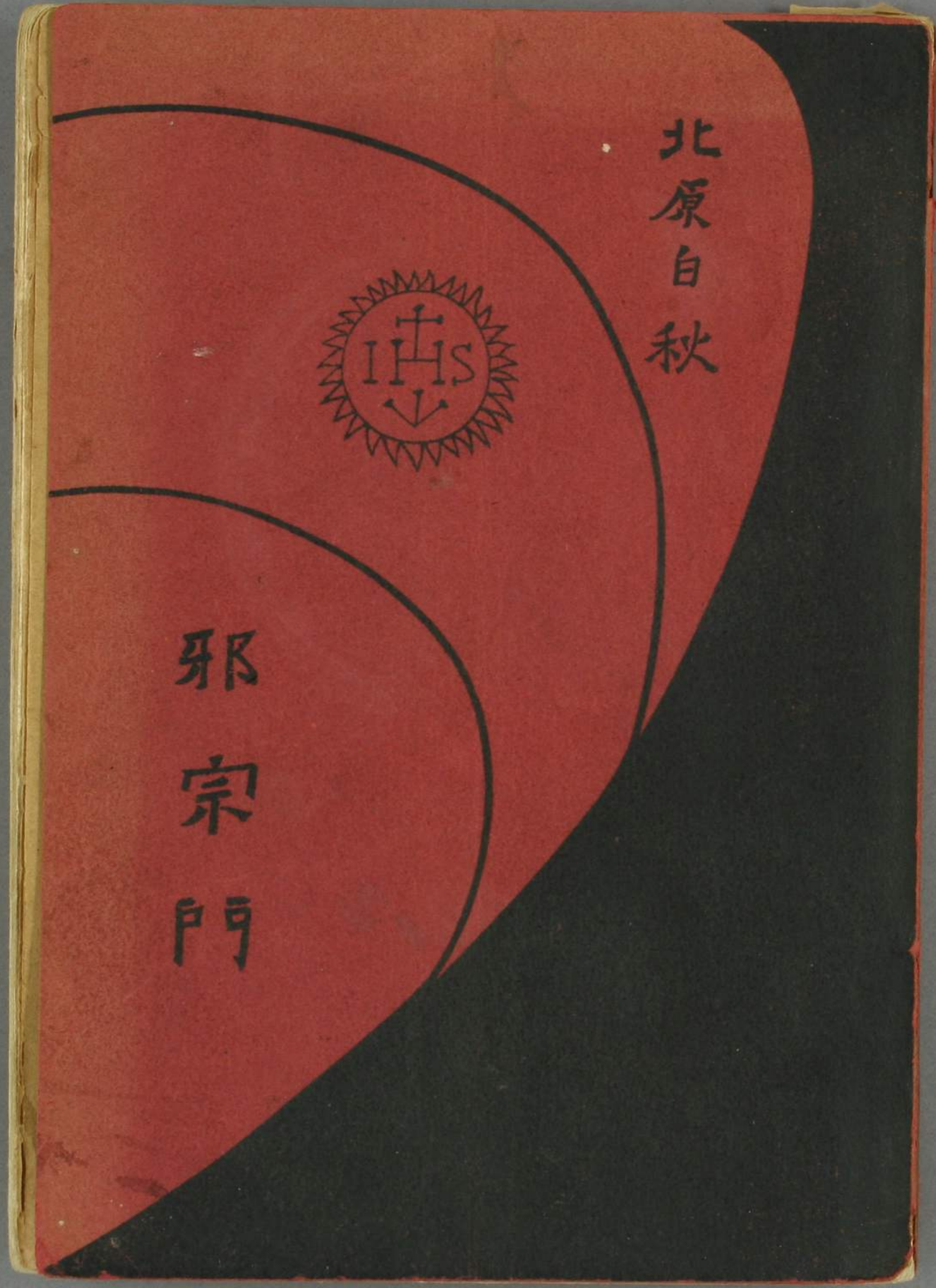
Red

Magenta

White

3/Color

Black



5

10

15

20

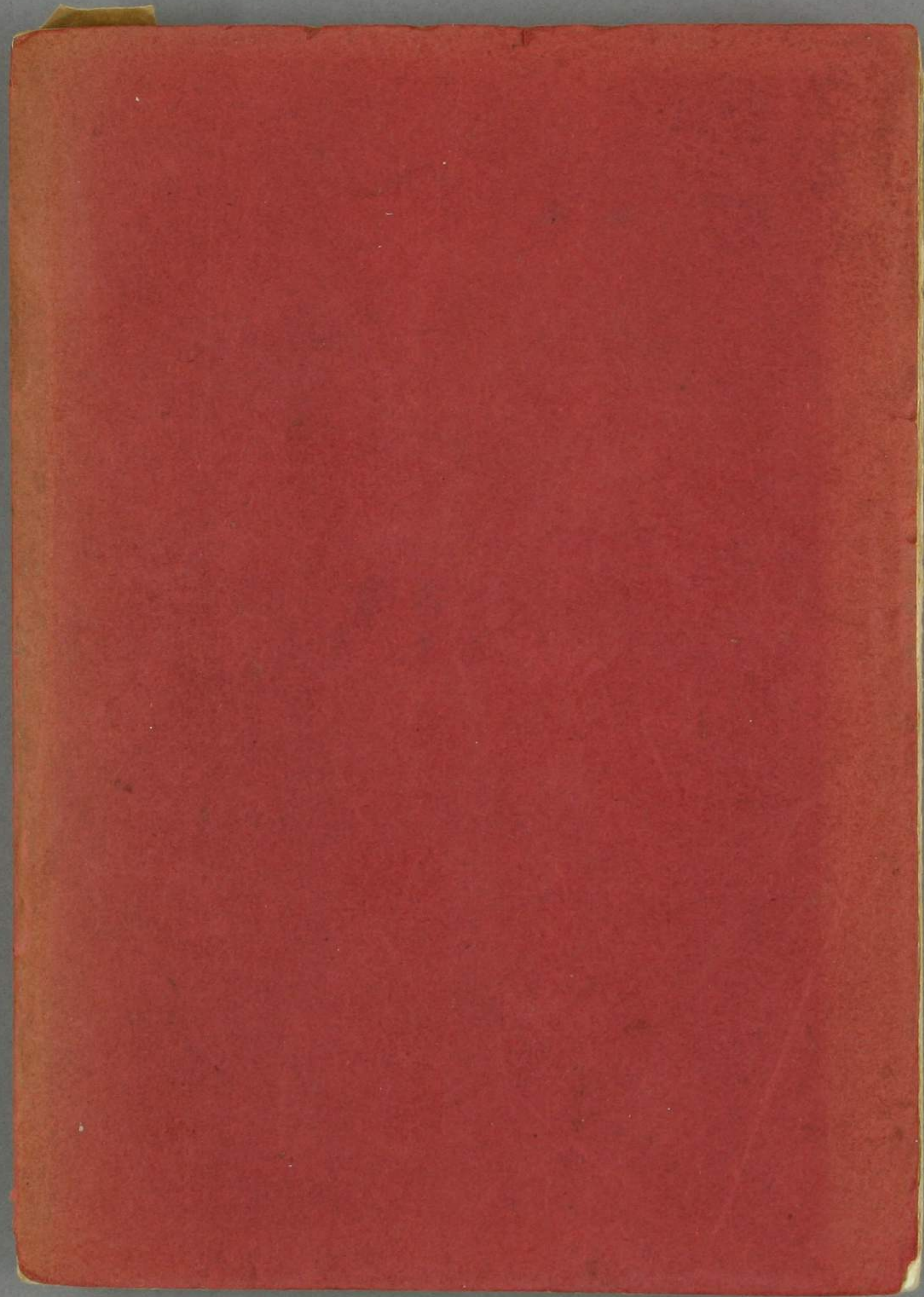
25



▼  
詩集  
邪宗門

北原白秋  
▲

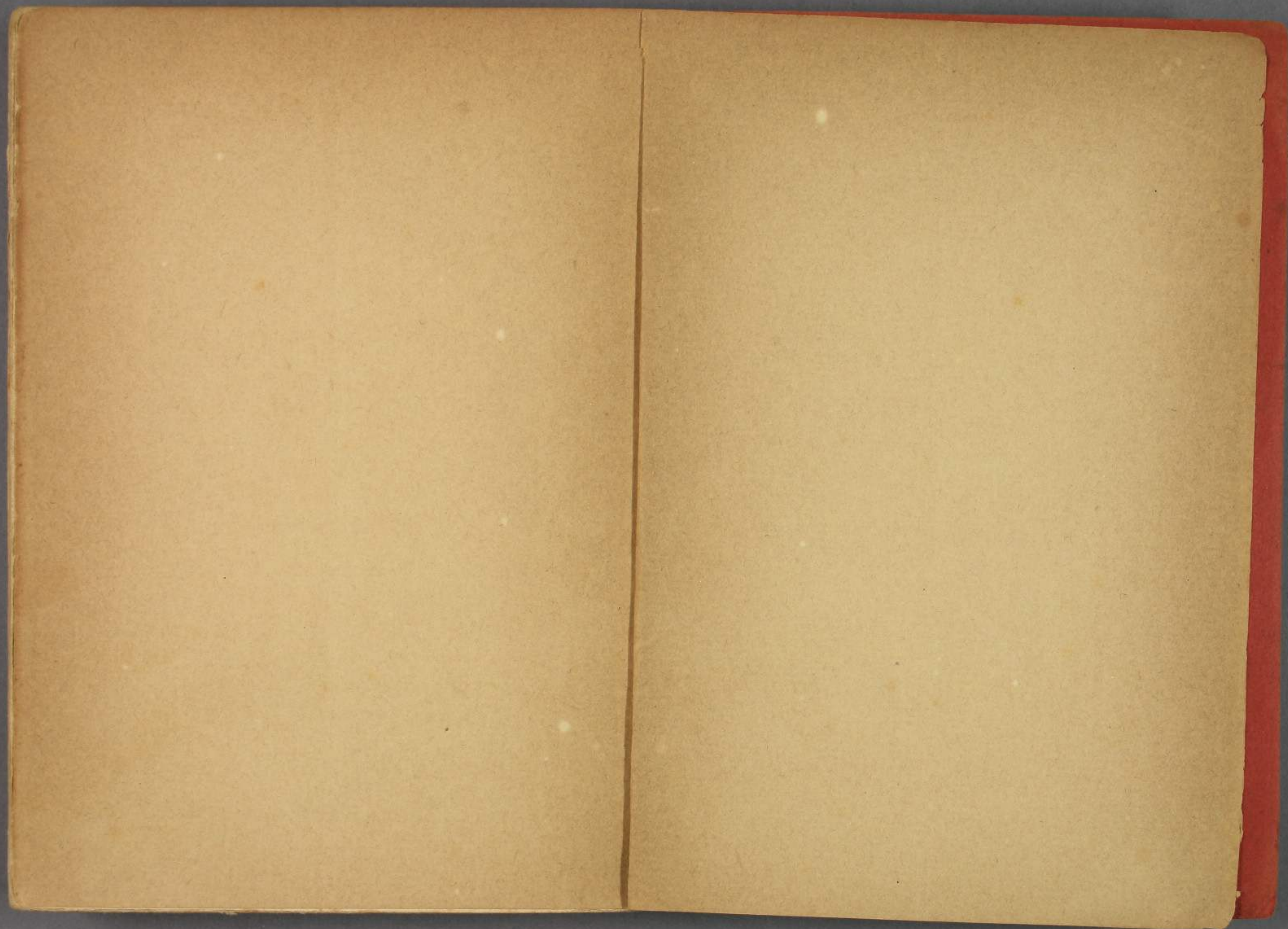
















詩集

邪宗門

北原山莊著



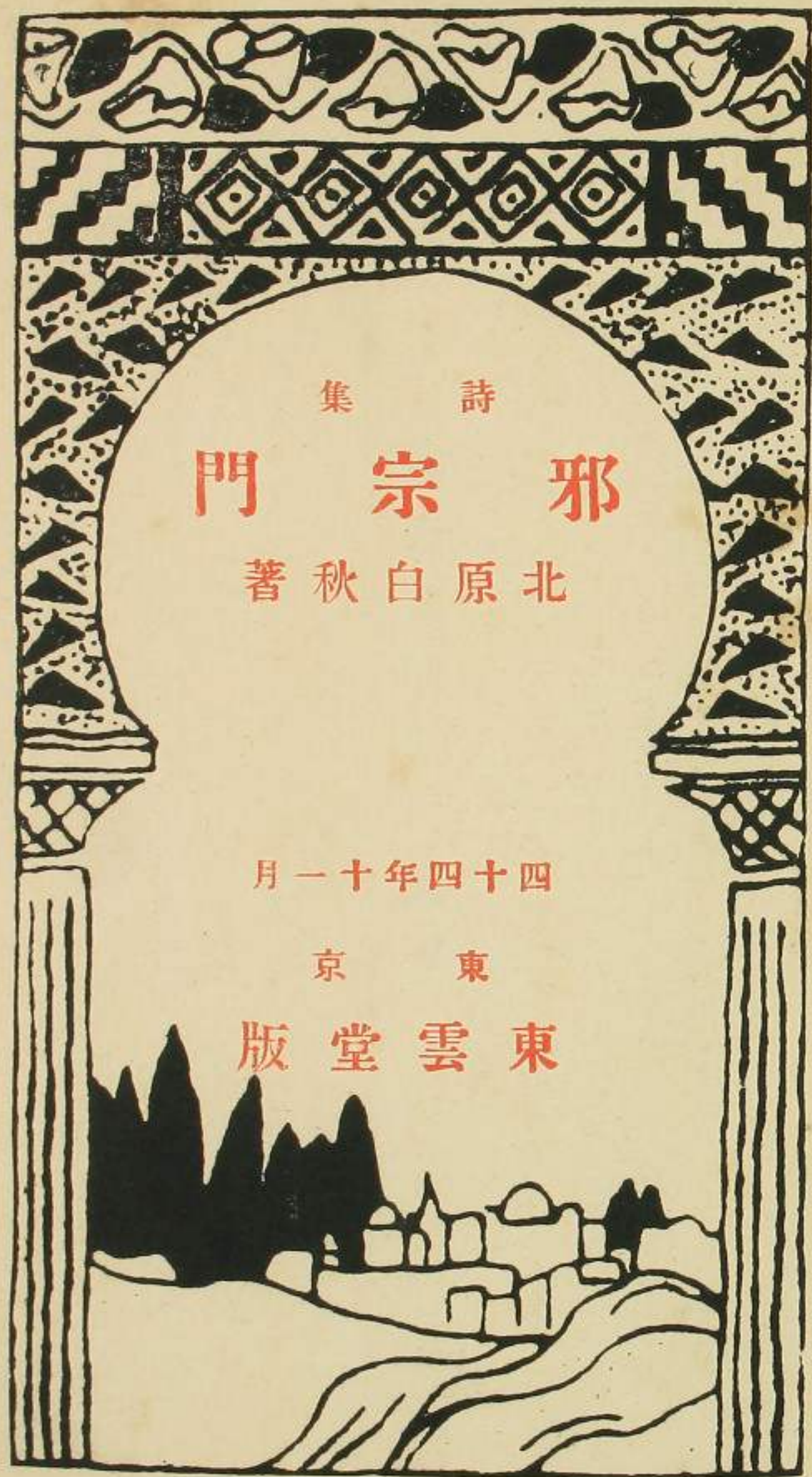
四十四年十一月

東京

東雲堂版

再版



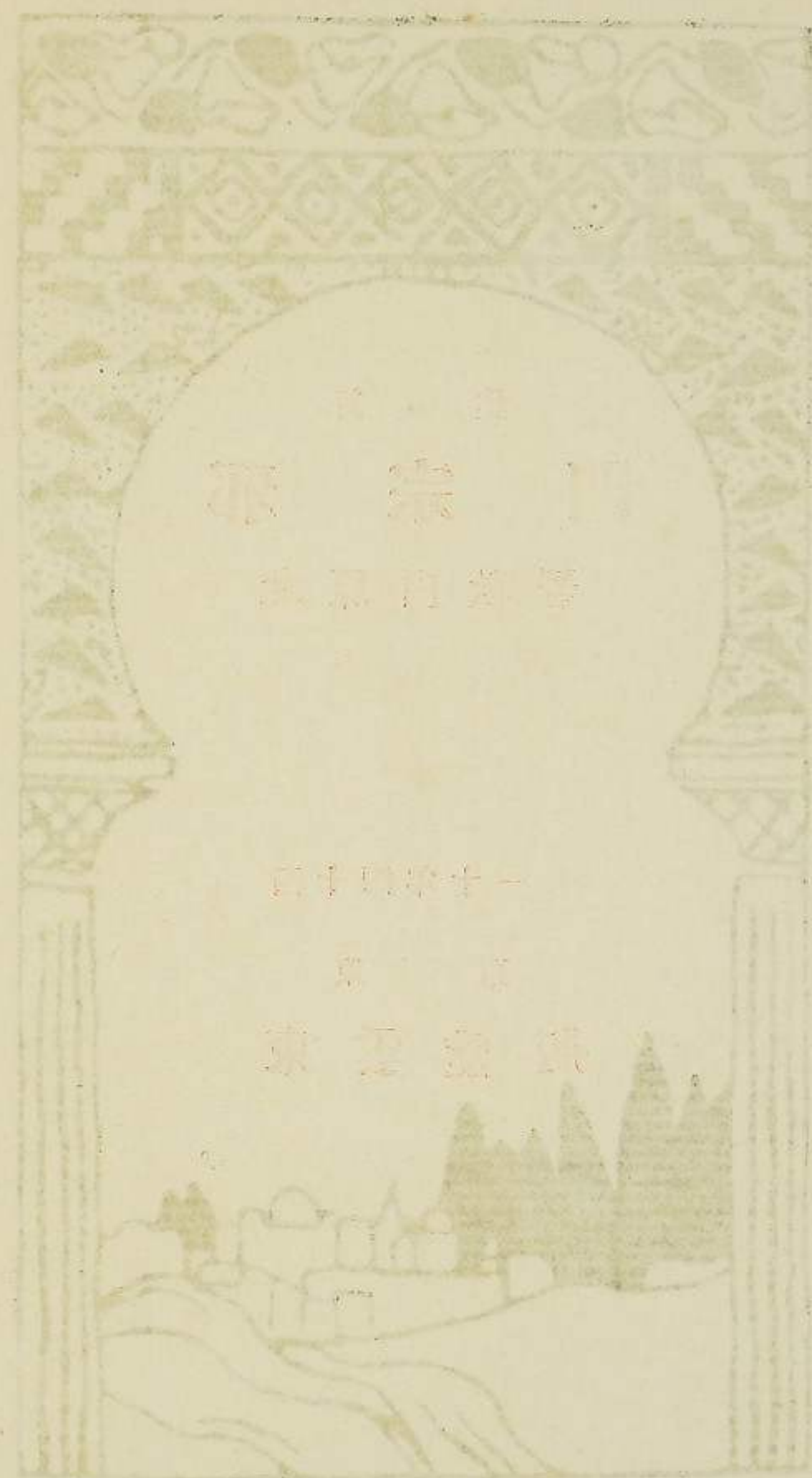


再  
版





蒲原有明氏に献ず







邪宗門扉銘

ここ過ぎて曲節クセツの惱みのむれに、  
ここ過ぎて官能の愉樂のそのに、  
ここ過ぎて神経のにかき麻酔に。





詩の生命は暗示にして單なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ盡し難き情趣の限なき振動のうち幽かなる心靈の歎歎をたづね、縹渺たる音樂の愉樂に憧がれて自己觀相の悲哀に誇る、これが象徴の本旨に非ずや。されば我らは神秘を尚び、夢幻を歡び、それが腐爛したる頹唐の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寢にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィンクスの瞳也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチッシュの音樂と幼兒磔殺の前後に起る心狀の悲しき叫也。かの黄臘の腐れたる絶間なき瘡壁と、オロンの三の絃を擦る嗅覺と、曇硝子にうち噎ぶウキスキイの鋭き神經と、人間の腦髓の色したる毒艸の匂深きためいきと、官能の覺睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鵝絨の手觸の棄て難さよ。



昔よりいまに渡り来る黒船緑がつく  
れば鱒の餌となる。サンタマリヤ。

『長崎ぶり』

再版例言

一、初版邪宗門を公にしてより殆ど三年、而かも多く世の顧るまこと  
ふらずして既に空しく湮没の厄に遇へり。ただその匂ひを知る人  
には、装幀の不可思議なる、かの南蠻寺鐘の紋章を金にて強く押した  
る血のごさく赤きクロースの半面に、接ぎわけたる色溢き更紗模様  
の、外光に狂へる瓊毒草、香木、麝香猫、及び禽獸歡樂の圖にある一種奇  
異なる感覺の記憶を留め得たりし事を信す。その實質に到りては  
もともとも幼き初期の試作といひ今さらに自ら深き羞耻を感ずるも  
のふれども、かの仄かふる抒情小曲集「思ひ出」の半身さして寧ろ重要  
なるわが初伊藝術の色調を代表するものふれば、幸に「思ひ出」四版の  
好機を得るに共に、殆ど滅に歸せんとしたる此の紙型をも漸くに探  
し求めて再び上梓せんす。その装ひを簡素にし、その風致の如何



をも改めたるは、一つには數少き初版の匂ひを愛惜したるを、また一つには更に別様の爽かさを望むわが移り氣の試みに外ならず。

一、邊にも云へる如く「邪宗門」と思ひ出<sup>二</sup>は兩々相俟ちて初めてわが第一期の詩風を完全に代表するものにして、前者を劇しき外光派の繪畫と見る時は後者はそのかげに顔へるテレピン油の微かふる潤りにも譬ふべきか。またこれらの音樂には狂ほしき近代の交響體を慄かせたれども、彼には仄かふる薄明のハアモニカか、たゞしは葱の畑にかくれて吹く銀笛のふげきにも似て少年のこころ覺束ふくもうち顔へり。「邪宗門」編纂の當時それらの凡てを輯めて彼よりも稍形整へる大冊たらしめんと欲したりしかども、紙數に限ありて已むを得ず、「斷章」と追憶風の小詩を後の日に譲れり。今本集の再版成るに及び、彼と此と相對應して改めて讀者の清鑑に價し得ば幸ふり。

一、本集に收めたる六章約百二十の詩篇は明治三十九年の四月より同

四十一年の臘月に至る、即ち其當時に於ける最近三年間の所作にして、集中の大半は殆最後の一年に成る。就中「古酒」中の「よひやみ」「柑子」

「晩秋」の類最も蓄く、「麻酔」に入れたる「室内庭園」「曇日」の二篇最も新し。

ふほ再版に際して、「酒と煙草」に「顔の印象」に二篇を削除し、之に代ふるに會て割愛したる七十餘篇中の「鯛」「我子の聲」の二作を以てしたり。

其他改む可かりしもの、添加したきもの、多くなを發見したれども、かかる事情の望みには限りなきを以て概ね初版の儘にさしをきたり。

一、わが當時の詩風に就ては今さら多く語るを欲せず。されど一言すればただ初めは印象風の繪畫的描寫より奔放限りなき音樂的象徴に出で、最後に捉へがたき内心の秘奥を探り、澄むよしもふき氣分の麻酔に身をうちひたさんさ欲するに至れり。その趣は時に從ひて様々なれども、何れも自らの官能に根柢を求めて、架空ふる空想さかの冷かふる觀念風の作爲を極端に退けたるは皆同じ。凡てわが





醉 麻

四

據る所は僅かふれども生れて享け得たる自己天稟の感覺を刺戟苦  
き神經の悅樂さにして、わが詩と生活とは常に同じ水脈の上に躍る  
陽光と飛魚との如くに入り亂れて、また常に痛ましき歎歎の影を投  
げたり。

一、初版を飾りし多くの挿畫のうち、「硝子吹く家」及び「青き花」惡の窓」の欄  
畫、卷頭のエキスリプリスの四個はその原版毀損或は散逸して遂に  
收拾す可らず。依て掲げず。

一、終に親しく本集裝幀の勞を煩はしたる高村光太郎氏の厚意を謝す

明治四十四年十一月

著 者 識



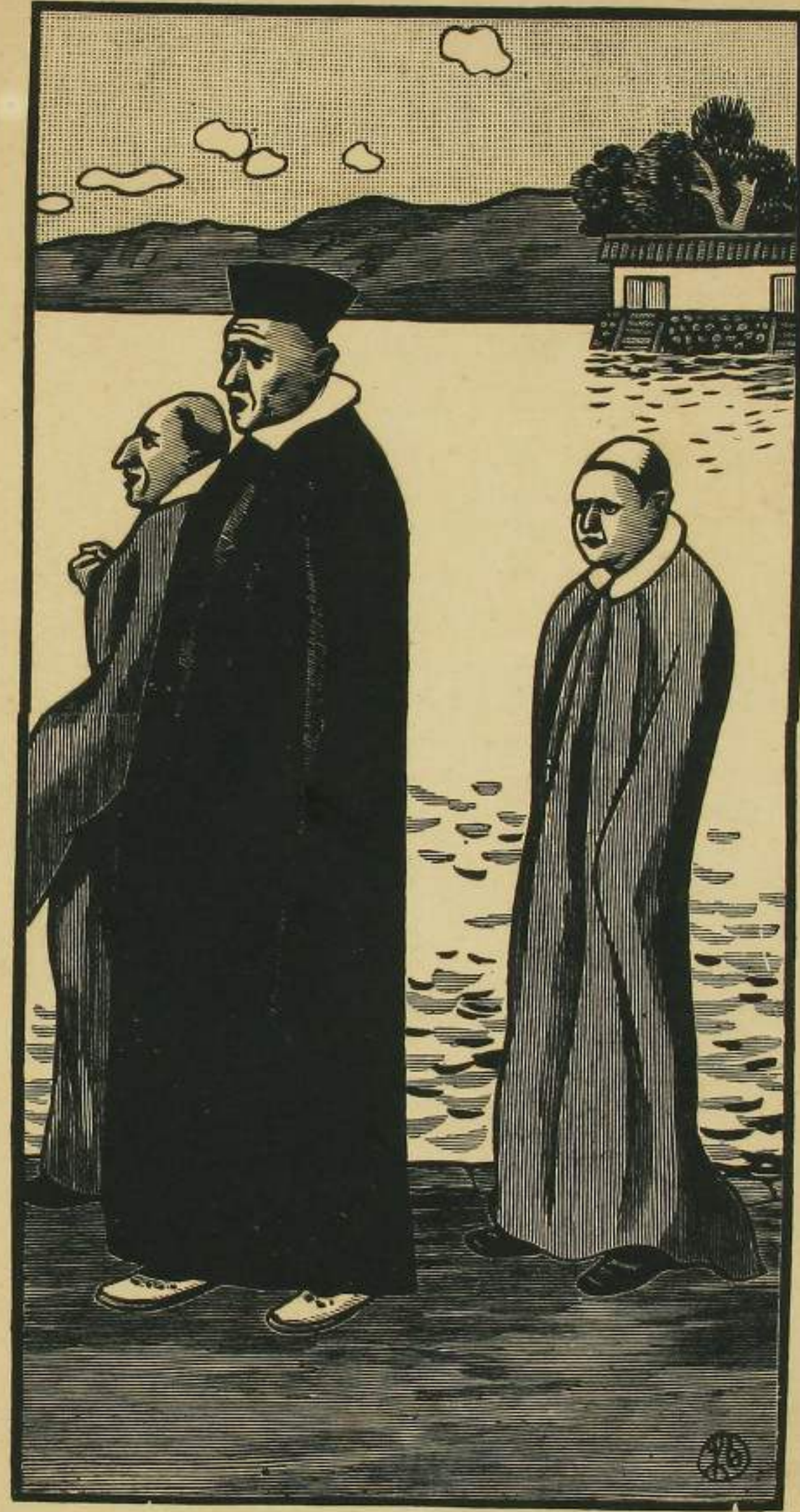


毒草のかけを走り疲れし縞青き蜥蜴の悲みを知る人あり  
や。わがこころはある日紅く曇りし濁江の空にそこさなく  
下りゆく風船のけはひに驚かされ、児供の河岸に泣かす人  
形の聲に刺されて、何ならぬ氣分の惱ましさを味ひぬ。か  
の強き油繪具に倦み、狂ほしき管絃樂にかきみだされしあ  
さに、何時しかわが求めしは捉へがたきある匂ひのムード  
なりき。かの氣分の、わきがたき陰影のなやみなりき。あはれ、  
楽しき一夜を躍り疲れしDaerの襟おしるいの汗のゆかしさ。



われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。  
 黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、  
 色赤きびいどろを、匂鏡きあんじやべいいる、  
 南蠻の棧留編をはた、阿刺吉、珍醜の酒を。

邪宗門秘曲





目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、  
禁制の宗門神をあるはまた血に染む聖磔、  
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、  
波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り大理石の白き血潮は、  
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點るといふ。  
かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、  
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く化粧の料は毒草の花よりしぼり、  
腐れたる石の油に書くてふ麻利耶の像よ、  
はた羅甸波爾杜瓦爾らの横つづり青なる假名は  
美しくしきさいへ悲しき歡樂の音にかも満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、  
百年を刹那に縮め血の磔脊にし死すとも  
惜しからじ願ふは極秘かの奇しき紅の夢、  
善主鷹今日を祈に身も靈も薫りこがるる。

四十一年八月



室内庭園

晩春の室内の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまり、赤くほのめき、  
やはらかにちらほへるへりオトロオプ。  
わかき日のなまめきのそのほめき静こころなし。

盡きせざる噴水よ……  
黄なる實の熟る草、奇異の香木  
その空にはるかなる硝子の青み、  
外光のそのなごり、鳴ける鶯  
わかき日の薄暮のそのしらべ静こころなし。



いま、黒き天鵝絨の

にほひ、ゆめ、その感觸……噴水に縫れたゆたひ、

うち濕る草の函、饒ゆる褐色

その空に暮れもかかる空気の吐息……

わかき日のその夢の香の腐蝕、静ころなし。

六

三層の隅か、さは

腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……

ものなべて惱ましき、盲ひし少女の

あたたかに匂ふかき感觸のゆめ、

わかき日のその霧に音は響く、静ころなし。

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

甘く、またちらばひぬ、ヘリオトロオプ。

わかき日は暮るれども夢はなほ静ころなし。

四十一年十二月

七



陰影の瞳

夕ゆづとなればかの思曇おもくも硝子がらすをぬけいでて、  
廢すたれし園あのなほ甘あまきときめきの香かに顛たふへつつ、  
はや鏡かがみえ萎なゆる芙蓉あざむぎ花はなの腐くされの紅あかきものかげと、  
縋つられてやまぬ秦皮あざむぎの陰影かげにこそひそみしか。

如何いかに呼よべども静しずまらぬ瞳ひとみに絶たえず涙なみだして、  
歸かへるともせず密ひそやかに、はた果はしなく見み入りぬる。  
そこともわかぬ森もりかげの鬱憂うらくの薄闇うすに、  
ほのかにのこる噴水ふんすいの青あおきひとすぢ……



赤き僧正

邪宗の僧ぞ彷徨へる……腫据ゑつつ、  
黄昏の薬草園の外光に浮きいでながら、  
赤々と毒のほめきの恐怖して、顔ひ戦く  
陰影のそこはかとなきおぼろめき

まへに、うしろに……さはあれど、月の光の  
水の面なる葦のわか芽に顫ふ時。  
あるは、靄ふる遠方の窓の硝子に  
ほの青きソロのピアノの咽ぶ時。  
腫据ゑつつ身動かす、長き僧服  
爛壞する暗紅色のにはひしてただ暮れなやむ。

さて在るは、囊に吸ひたる

Hachischの毒のめぐりを待てるにか、

あるは劇しき歡樂の後の麻酔や忍ぶらむ。



手に持つは黒き梟  
燦々と眼は光る……

……そのすそに蟋蟀の啼く……

四十一年十二月

### WHISKY.

夕暮のものあかき空、  
その空に百舌啼きしきる。  
Whiskyの櫃の列  
冷やかに拭く少女、  
見よ、あかき夕暮の空、  
その空に百舌啼きしきる。

四十一年十一月



天鵝絨のにほひ

やはらかに腐れつつゆく暗の室。  
その片隅の薄あかり、背にうけて  
天鵝絨の赤きふくらみうちかつぎ、  
にほふともなく在るとなく、蹲み居れば。

暮れてゆく夏の思と、日向葵の  
湖れの甘き香もぞする。……ああ見まもれど  
おもむろに惱みまじろふ色の陰影  
それともわかね……熱病の闇のをのき……

Hachisch か、酔か、茴香酒か、くるほしく  
溺れしあとの日の疲勞……纏れちらほふ  
Wagnerの戀慕の樂の音のゆらぎ  
耳かたぶけてうち透かし、在りは在れども。



それらみな素足のもとのからがり  
に爛壞の光放つとき、そのかなしみの  
腐れたる曲の縁を如何にせむ。  
君を思ふとのたまひしゆめの言葉も。

わかき日の赤きなやみに織りいでし  
にほひ、いろ、ゆめ、おぼろかに嗅ぐとなけれど、  
ものやはに暮れもかぬれば、わがこころ  
天鵝絨深くひきかつぎ、今日も涙す。

## 濃霧

濃霧はそそぐ……腐れたる大理の石の  
生くさく吐息するかと蒸し暑く、  
はた、冷やかに官能の疲れし光――  
月はなほ夜の氛圍氣の朧なる恐怖に懸る。



濃霧はそそぐ……ここに蟲の神經  
鋭く、甘く、壓しつぶさるる嗟嘆して  
飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。  
薄ら闇、盲啞の院の角硝子暗くかがやく。

濃霧はそそぐ……さながらに戦く窓は  
亞刺比亞の魔法の館の薄笑。  
麻痺薬の酸ゆき香に日ねもす噎せて  
聾したる、はた、盲ひたる圓頂閣か、壁の中風。

濃霧はそそぐ……甘く、また、重く、くるしく、  
いづくにか凋れし花の息づまり、  
苑のあたりの泥濘に落ちし燕や、  
月の色半死の生に憐むごとただかき曇る。

濃霧はそそぐ……いつしかに蟲も盲ひつつ  
聾したる光のそこにうち痺れ、  
啞とぞなる。そのときにひとつの硝子  
幽魂の如くに青くおぼるめき、ピアノ鳴りいづ。



濃霧はそそぐ……敷の、見よ、人かげうごき、  
閑くる夜の恐怖か、痛きわななきに  
ただかいさぐる手のさばき——靈の彈奏、  
盲目弾き、啞と聾者圓ら眼に重なり覗く。

濃霧はそそぐ……聲もなき聲の密語や。  
官能の疲れにまじるすすりなき  
靈の震慄の音も甘く聾しゆきつつ、  
ちかき野に喉絞めらるる淫れ女のゆるき極撃。

濃霧はそそぐ……香の腐蝕、肉の衰頹、——  
呼吸深く嘔囉彷彿や吸ひ入るる  
靡たる暑き夜の麻酔……重く、いみじく、  
音もなき盲啞の院の氛圍氣に月はしたたる。



### 赤き花の麻醉

Hは眞晝、ものあたたかに光素の  
波動は甘く、また、緩るく、戸に照りかへす、  
その濁る硝子のなかに音もなく、  
囁囁仿謨の香ぞ滴る……毒の謠言……  
遠くきく、電車のきしり……

……棄てられし水薬のゆめ……

やはらかき猫の柔毛と、蹠の  
ふくらのしるみ惱ましく過ぎゆく時よ。  
窓の下、生の痛苦に只赤く戦ぎえたてぬ草の花  
亞鉛の管の  
濕りたる笥のすそに……いまし麻醉す……

四十一年十二月



麥の香

嬰兒泣く……麥の香の濕るあなたに、  
續け泣く……やはらかに、なやましげにも、  
香に噎び、香に噎び、あはれまた、嬰兒泣きたつ……  
夏の雨さと降り過ぎて  
新にもかをり蒸す野の畑いくつ濕るあなたに、  
赤き衣一きは若く、にほやかにけふる搖籃や、  
磨硝子、あるは窓枠、濡れ濡れて夕日さしそふ。

四十一年十二月

曇日

曇日の空氣のなかに、  
狂ひいづる樟の芽の鬱憂よ……  
そのもとに桐は咲く。  
Whiskyの香のごときしぶきかなしみ……



ここにいたなき駱駝の寢息、  
 見よ、鈍き綿羊の色のよごれに  
 體えて病む葉のくさみ、  
 その濕る泥濘に花はこぼれて  
 紫の薄き色鏡になげく……  
 はた、空のわか葉の威壓。

いづこにか、またもきけかし。  
 餌に餓ゑしベリガンのけうとき叫、  
 山猫のものさやぎなげく鶯、

腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

そのなかに桐は散る……Whiskyの強きかなしみ……

もの甘き風のまた生あたたかさ、  
 猥らなる獸らの圍内のあゆみ、  
 のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、貧しく  
 眼を据ゑて毛蟲啄む嗟歎のほろほろ鳥よ。

そのもとに花はちる……桐のむらさき……



かくしてや日は暮れむ、あひと日。  
病院を逃れ來し患者の恐怖、  
赤子らの眼のなやみ、笑ふ黒奴、  
酔ひ痴れし遊蕩兒の縦覽のとりとめもなく。

その空に桐はちる……新しきしぶき、かなしみ……

はたや、また園の外ゆく  
軍樂の黒き不安の壞れ落ち、夜に入る時よ、

やるせなく騒ぎいでぬる鳥獸。

また、その中に、  
狂ひいづる北極熊の氷なす戰慄の聲。

その闇に花はちる……Whiskyの香の頻吹……桐の紫……

四十一年十二月



秋の瞳

晩秋の濡れにたる鐵柵のうへに、  
黄なる葉の河やなぎほつれてなげく……  
やはらかに葬送のうれひかなでて、  
過ぎゆきし Trombone ithubuchi にけむ。

はやも見よ、暮れはてし吊橋のすそ、  
瓦斯點る……いざたなき馬の吐息や、  
騒ぎやみし曲馬師の樂屋なる幕の青みを  
ほのかにも掲げつつ水の面見る女の瞳。



空に眞赤な

空に眞赤な雲のいろ。  
玻璃に眞赤な酒の色。  
なんでこの身が悲しかる。  
空に眞赤な雲のいろ。

四十一年五月

秋のをはり

腐れたる林檎のいろに  
なほ青きにほひちらほひ、  
水薬の汚みし卓に  
瓦斯焜爐ほのかに燃ゆる。



病人は肌ををさめて  
 愁はしくさしぐむごとし。  
 何ぞ濕る、醫局のゆふべ、  
 見よ、ほめく劇薬もあり。  
 色冴えぬ室にはあれど、  
 聲たててほのかに燃ゆる  
 瓦斯焔爐……空と、こころと、  
 硝子戸に鈍ばむさびしさ。

しかはあれど、寒きほのほに  
 黄の入り日さしそふみぎり、  
 朽ちはてし秋の井オロン  
 ほそぼそとうめきたてぬる。



## 十月の顔

顔なほ赤し……うち曇り黄ばめる夕、  
『十月』は熱を病みしか、疲れしか、  
濁れる河岸の磨硝子脊に凭りかかり、  
霧の中、入日のあとの河の面をただうち眺む。  
そことなき櫂のうれひの音の刻み……

涙のしづく……頬にもまたゆるきなげきや……

ややありて麩包の破片を手にも取り、  
さは冷やかに噛みしめて、来るべき日の  
味もなき悲しきゆめをおもふとき……

なほもまた廉き石油の香に噎び、  
腐れちらほふ骸炭に足も汚れて、  
小蒸汽の灰ばみ過ぎし船腹に  
一きは赤く輝やきしかの窓枠を忍ぶとき……



月光ははやもさめざめ……涙さめさめ……  
十月の暮れし片頬を  
ほのかにもうつしいだしぬ。

三八

四十一年十二月

### 接吻の時

薄暮か、  
日のあさあけか、  
晝か、はた、  
ゆめの夜半にか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩暈、  
赤き震慄の接吻にひたと身顛ふ刹那。

三九



あな、見よ、青き大月は西よりのぼり、  
 あなや、また瘡病む終の顫して  
 東へ落つる日の光、  
 大ぞらに星はなげかひ、  
 青く盲ひし水面には薬香にほふ。

あはれ、またわが立つ野邊の草は皆色も干乾び、  
 折り伏せる人の骸の夜のうめき、  
 人靈色の

木の列は、あなや、わが挽歌うたふ。

かくて、はや落穂ひろひの農人が寒き睡よ。  
 歡樂の穂のひとつだに残さじと、  
 はた、刈り入るる鎌の刃の痛き光よ。  
 野のすゑに獣らわらひ、  
 血に饑えて汽車鳴き過ぐる。

あなあはれ、あなあはれ、  
 二人がほかの靈のありとあらゆるその咒咀。



朝明か、  
死の薄暮か、  
晝かなほ生れもせぬ日か、  
はた、いづれともあらばあれ。

われら知る赤き唇。

四十一年六月

### 濁江の空

腐れたる林檎の如き日のほひ  
圓らに、さあれ、光なく甘げに沈む  
晩春の濁重たき霧の内、  
ただそこそなく軽気球くだるけはひす。



遠方の曇れる都市の屋根の色  
たゆげに仰ぐ人はいま鈍くもきかむ、  
濁江のねぶたき、あるは、やや赤き  
にほひの空のいづこにか洩るる鐵の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より  
あかるともなき灰紅の帆のふくらみに  
傳へくる潜水夫が作業にか、  
鐘えたる吐息そこはかと水面に黄ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、  
はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。  
日暮どき、入日に濁る靄の内、  
また、ふくらかに輕氣球くだるけはひす。



魔國のたそがれ

うち曇る暗紅色の大きき日の  
魔法の國に病ましげの笑して入れば、  
もの甘き驢馬の鳴く音にもよほされ、  
このもかのものに惱ましき吐息ぞおこる。

そのかみの激しき夢や忍ぶらむ。  
鬱黄の百合は血ににじむ眸をつぶり、  
人間の聲して挑み、飛びかはし  
鸚鵡の鳥はかなしげに翹ふるはす。

草も木もかの誘惑に化されつる  
旅のわかうど、暮れ行けば心ひまなく  
えもわかぬ毒の怨言になやまされ、  
われと悲しき歡樂に怕れて顫ふ。





朱の伴奏

日は沈み、たそがれどきの空の色  
青き魔薬の薫して古りつつゆけば、  
ほのかにも誘はれ来る隊商の  
鈴鳴る……あはれ、今日もまた恐怖の豫報。

はとばかり黙み戦くものの息。  
色天鵝絨を擦ることき裳裾のほかは  
聲もなく甘く重たき雷の闇、  
はやも王女の領らすべき夜とこそなりぬ。



凡て情緒也。靜かなる精舎の庭にほのめきいで紅の戦慄に盲ひたる井オロンの響はわが内心の旋律にして、赤き絶叫のなかにほのかに啼けるこほろぎの音はこれ亦わが情緒の一絃によりて密かに奏でらるる愁也。なげかひ也。その他おほむれ之に倣ふ。



## 蜜の室

薄暮の潤みにこれる室の内、  
甘くも腐る百合の蜜はた、露ぼかし  
色赤きいんくの饅のかたちして  
ひそかに點る豆らんぶ息づみ曇る。



「豊國」のぼやけし似顔生ぬるく、  
曇硝子の窓のそと外光なやむ。  
ものの本、あるはちらばふ日のなげき、  
暮れもなやめる靈の金字のほひ。

接吻の長き甘さに倦きぬらむ。  
そと手をほどき靄の内さぐる心地に、  
色盲の瞳の女うらまどひ、  
病めるペリガンいま遠き湿地になげく。

かかるとき、おぼめき摩る Violon の  
なやみの絃の手觸のほひの重さ。  
鈍き毛の絨氈に甘き蜜の闇  
澱み儘えつつ……血のごともらんぶは消ゆる。



蝸

胸にはた、  
夕日の幹みぎに、  
つと來り、蝸かたかななげく。

かなかなかなかな……かなかなかなかな……

黄金がねなす細き施律

せはしげに、また、かなしげに。

かなかなかなかな……かなかなかなかな……。

かくて、また鳴きつつ熟視みむ、  
榮はえあかる思より、  
梢より、  
實のひとつ落ちむとするを。

かなかなかなかな……かなかなかなかな……四十一年六月



鈴の音

日は赤し、窓の上に恐怖の鳥、  
ひた黙み暮れかかる砂漠を熟視む。

今日もまたもの鈍き駱駝をつらね、  
一群のわがやから消えさりゆきぬ。  
もの甘き鈴の音、ああそを聴けよ。  
からら、からら、ら、ら……

暮れのこるピラミドの暗紅色よ。  
そが空のうち濁る重き空気よ。  
いづこにか月の色ほのめくごとし。  
からら、からら、ら、ら……



かの群よ、霧ふかく、いまかひろぐる  
色鈍き、幽爵の毛織の天幕。  
駱駝らのためいきもそこはかとなく。

からら、からら、ら、ら、ら……

もの青く暮れてみな蒸しも見わかぬ。  
體え温るむ空のをち、薄らあかりに、  
ほのかにも此方見るスフィンクスの瞳。  
からら、からら、ら、ら、ら……

あはれ、その静かなるスフィンクスの瞳。  
ああ暗示……えもわかぬ夢の象徴。  
またくいま埃及の夜とやなるらむ。  
からら、からら、ら、ら、ら……

鳥いまはたはたと遠く飛び去り、  
窓にただ色あかき燈火點る。



夢の奥

ほのかにもやはらかきにほひの園生。  
あはれ、そのゆめの奥。日と夜のあはひ。  
薄あかる空の色ひそかに顔ひ  
暮れもゆくそのしほし、聲なく立てる  
眞白なる大理石の男の像

微妙じくもまた貴に瞑目りながら  
清らなる面の色かすかにゆめむ。

ものなべてさは妙に女の眼ざし  
あはれそが夢ふかき空色しつつ、  
にほやかになやましの思はうるむ。  
そがなかに埋もれたる素馨のなげき。  
蒸し甘き沈丁のあるは刺せども  
なにほどの香の痛み身にしおぼえむ。  
わかうどは聲もなし、清く、かなしく。



薄暮にせきもあへぬ女の吐息  
あはれその愁如し、しぶく噴水  
そことなう節ゆるうゆらゆるなべに、  
いつしかとほのめきぬ月の光も。  
その空に、その苑に、ほの青みに  
静かなる歎歎泣きもいでつつ、  
いづくにか、さまだるる愛慕のなげき。  
やはらかきほの熱る女の足音

あはれそのほめき如し、燃えも生れゆく  
ゆめにほふ心音のうつつなきかな。  
大理石の身の白み、面もほのかに、  
ひらきゆくその眼ざし、なれば閉ちつつ、  
ゆめのごと空仰ぎ、いまぞ見惚るる。  
色わかき夜の星、うるむ紅。



窓

かかる窓ありとも知らず昨日まで過ぎし河岸。  
今日は見よ、  
色赤き花に日の照り、かなしくも依依兒句ふ。  
あはれまた病めるPianoも……

四十一年九月

昨日と今日と

わかうどのせはしさよ。  
さは昨日世をも厭ひて重格魯密母求めも泣きしか、  
今朝ははや林檎吸ひつつ霧深き河岸路を辿る。  
歌樂し、鳴らす木履に……

四十一年十一月



わかき日

『かくまでも、かくまでも、  
わかうどは悲しかるにや。』  
『さなり、女、  
わかき日には、  
ましてまた才ある身には。』

四十一年十一月

謀 叛

ひと日、わが精舎の庭に、  
晩秋の静かなる落日のなかに、  
あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のなかに、  
いとほのに、オロンの、その絃の、  
その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。



蠟の火と懺悔のくゆり  
 ほのぼのと、廊いづる白き衣は  
 夕暮に言もなき修道女の長き一列。  
 さあれ、いま、井オロンの、くるしみの、  
 刺すがごと火の酒の、その絃のいたみ泣く。

またあれば落日の色に、  
 夢燃ゆる噴水の吐息のなかに、  
 さらになほ歌もなき白鳥の愁のもとに、

いと強き硝薬の、黒き火の、  
 地の底の導火燧き、井オロンぞ狂ひ泣く。

跳り来る車輛の響、  
 毒の弾丸、血の烟、閃めく刃、  
 あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精舎も、空も。  
 紅の、戦慄の、その極の  
 瞬間の叫喚燧き、井オロンぞ盲ひたる。



こほろぎ

微ほにいまこほろぎ啼なける。

日ひか落おつる——眼めをみひらけば  
朱しゆの畏おそ怖おそくわと照てりひびく。

内ない心しんの苦にがきおびえか、  
めくるめく痛いたき日ひの色  
眼めつぶれど、はた、照てりひびく。

そのなかにこほろぎ啼なける。

とどろめく銃つづ音おとしばし、  
痰かつける悪あくのうごめき  
そこここに、あるは疲つかれて  
轆しきなやむ砲ほう車しゃのあへぎ、



逃げまどふ赤きもろごる。

七〇

そのなかにこほろぎ啼ける。

盲<sup>めくら</sup>ひゆく戀のまぼろし――

その底に疼<sup>うづ</sup>きくるしむ

肉<sup>しんら</sup>の鋭<sup>すど</sup>き絶<sup>さげ</sup>叫<sup>び</sup>、

はた、暗<sup>くら</sup>き曲<sup>きよく</sup>の死<sup>し</sup>の樂<sup>がく</sup>

靈<sup>たましひ</sup>ぞ弾<sup>つ</sup>きも連<sup>つ</sup>れぬる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

あなや、また呻<sup>うなき</sup>吟は洩<sup>も</sup>るる。

鉛<sup>なまり</sup>めく首のあたりゆ

幽<sup>いゆう</sup>界<sup>かい</sup>の呪<sup>のろ</sup>咀<sup>ひ</sup>か洩<sup>も</sup>るる。

寢<sup>ね</sup>がへれば血に染み顛<sup>たふ</sup>ふ

わが敵<sup>かたき</sup>面<sup>おも</sup>ぞ死にたる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

七一



はた、裂くる赤き火の彈丸  
たと笑ふと見る、我燬き  
我ならぬ獸のつらね  
眞黒なる樂して奔る。  
執念の闇曳き奔る。

そのなかにこほろぎ啼ける。

日や暮るる。我はや死ぬる。  
野をあげて末期のあらび――

暗き血の海に溺るる  
赤き悲苦、赤きくるめき、  
ああ、今し、くわとこそ狂へ。  
微になほこほろぎ啼ける。



序 樂

ひと日、わが想の室の日もゆふべ、

光もののね、色、にほひ——聲なき沈黙  
徐にとりあつめたる室の内、いとおもむろに、  
薄暮のタンホイゼルの譜のしるし  
ながめて人はゆめのごとほのかにならぶ。

壁はみな鈍き愁ゆなりいでし  
象の香の色まろらかに想鎖しぬれ、  
その隅に腫の色の窓ひとつ、玻璃の遠見に  
冷えはてしこの世のほかの夢の空  
かはたれどきの薄明ほのかにうつる。



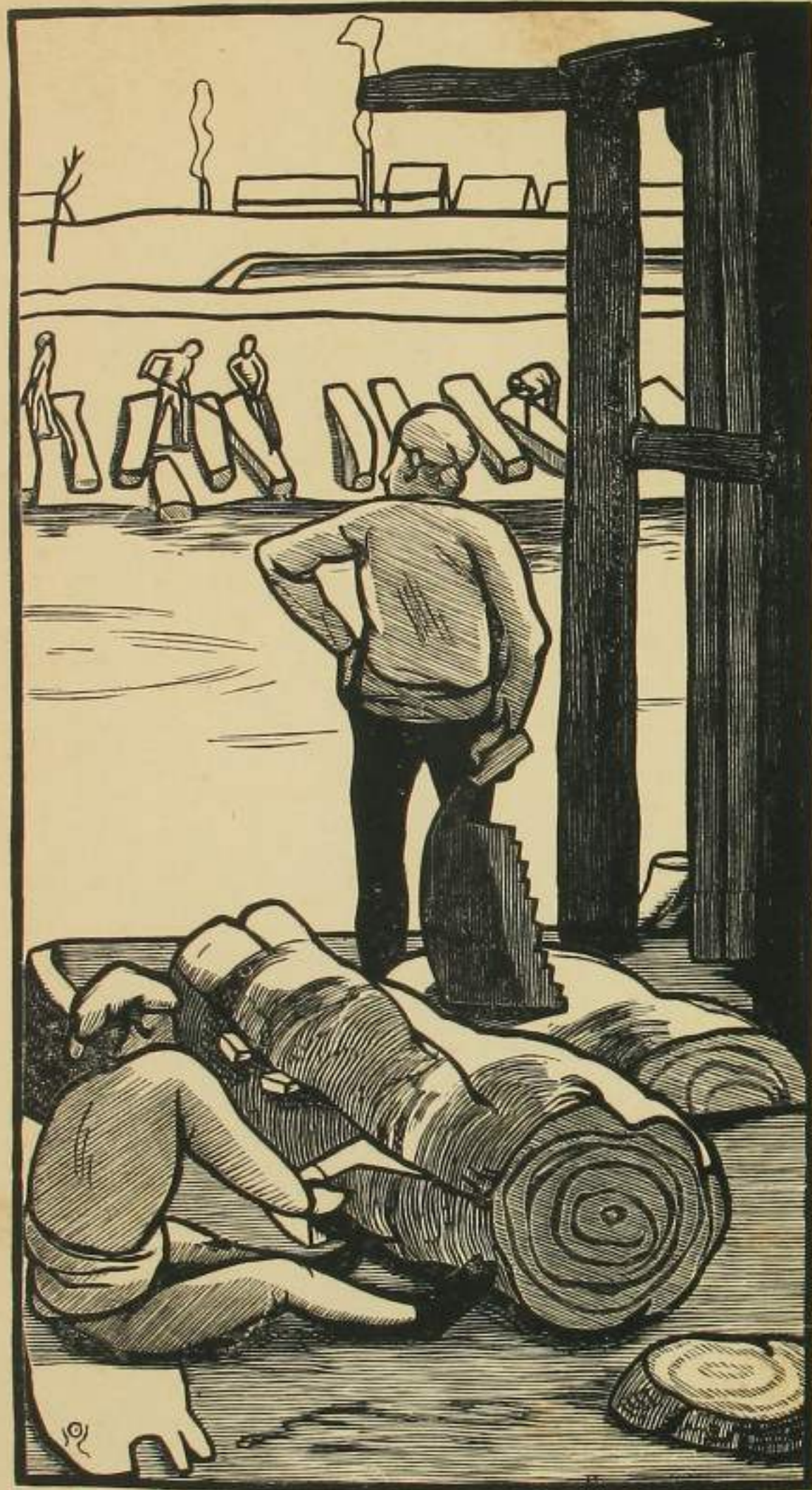
あはれ、見よ、そのかみの苦惱むなしく  
壁はいたみ、圓柱、熔けくづれて  
朽ちはてし、熔岩に埋るるポンペイを、わが幻を。  
ひとびとはいましゆるかに絃の弓、  
はた、もろもろの調樂の器をぞ執る。

暗みゆく室内よ、暗みゆきつつ  
想の沈黙重たげに音なく沈み、  
そことなき月かげのほの淡くさし入るなべに、

はじめまづオロンのひとすすりなき、  
鈍色長き衣みな睡をつぶる。

燃えそむるヴェスピアス、空のあなたに  
色新しき紅の火を噴きのぼる。  
廢れたる夢の古城、さとあかる我室内、  
ひととときに渦巻きかへす序のしらべ  
管絃樂部のうめき湧き夜には入りぬる。





納曾利

入日のしばし、空はいま雲の震慄のあかあかと  
 鋭にわかく、はた、苦く狂ひただるる樂の色。  
 また、高窓の鬱金香。かげに斃るる白牛の  
 眉間のいたみ、憤怒。血に笑む人がさけびこゑ。





さあれ、いま納曾利のなげき……  
鈍き思の灰色の壁の家に、  
吹き鳴らす古き舞樂の笙の節、  
納曾利のなげき……

納曾利のなげき、ひとしなみ  
おほらにほふ雅樂寮の古きいみじき日の愁、  
納曾利の舞の  
人のゆめ、鈍くものうき足どりの裾ゆるらかに、  
おもむろの振のみやびの舞あそび、



納會利のなげき……

くりかへし、さはくりかへし、  
ゆめのごと後に連るる笙の節、  
笛のねとりもすすろかに、廣き家内に、  
おなじことおなじ嬬にくりかへし、  
舞へる思の  
倦める思のにはやかさ、  
ゆるき鞆鼓の  
音もにぶく、

古き納會利の舞をさめ……

今しも街の空高く消ゆる光のわななきに、  
ほのかに青く、なほ苦く顔ひくづるる雲の色。  
また、浮きのこる鬱金香。暮れて果てたる白牛の  
聲なき骸人だかり、血を見て黙す冷笑。

四十一年七月



ほのかにひとつ

罌粟<sup>リシ</sup>ひらく、ほのかにひとつ、  
また、ひとつ……

やはらかき麥<sup>セキ</sup>生のなかに、

軟風<sup>カンフウ</sup>のゆらゆるそのに。

薄<sup>ウス</sup>き日の暮るとしもなく、  
月<sup>ツキ</sup>しるの顔<sup>オモて</sup>ふゆめちを、

縫<sup>ぬい</sup>れ入るピアノの吐息<sup>トキ</sup>  
ゆふぐれになぞも泣かるる。

さあれ、またほのに生<sup>あ</sup>れゆく  
色あかさなやみのほめき。



やはらかき麥生の霧に、  
軟風のゆらゆる胸に、

罌粟ひらく、ほのかにひとつ。  
また、ひとつ……

## 耽溺

あな悲し、紅き帆きたる。  
聴けよ、今、紅き帆きたる。

白日の光の水脈に、  
わが戀の器樂の海に。



あはれ、聴け、光は噫び、  
 海顛ひ、清搔焦がれ  
 眩暈めく悲愁の極、  
 苦悶そふ歡樂のせて  
 キュラソオの紅き帆ひびく。  
 弾けよ、弾け、毒の井オロン  
 吹けよ、また媚薬の嵐。  
 あはれ歌、あはれ幻、  
 その海に紅き帆光る。

海の歌きこゆ、このとき、  
 「噫、かなし、炎よ、慾よ、  
 接吻よ。」

聴けよ、また苦き愛着、  
 肉のおびえと恐怖、  
 「死ねよ、死ね、紅き帆響く、  
 「戀よ、汝よ。」



弾けよ、弾け、毒の井オロン  
吹けよ、また媚薬の嵐。

八八

一瞬よ、—光よ、水脈よ、

樂の音よ—酒のキエラソオ、

接吻の非命の快樂、

毒水の火のわななきよ。

狂へ、狂へ、破滅の渚、

聴くははや樂の大極、  
狂亂の日の光吸ふ  
紅き帆の終のはためき。

死なむ、死なむ、二人は死なむ。

紅き帆きゆる。  
紅き帆きゆる。

四十年十二月

八九



といき

大空に落日ただよひ、  
旅しつづ燃えゆく黄雲。  
そのしたの伽藍の蔓  
半黄になかばほのかに、  
薄闇に蠟の火にほひ、  
圓柱またく暮れたる。

ほのめくは鳩の白羽か、  
敷石の闇にはひとり  
盲の子ひたと膝つけ、  
ほのかにも尺八吹ける、  
あはれ、その追分のふし。



黒船

黒煙ほのにひとすぢ。――  
あはれ、日は血を吐く悶あかあかと  
濡れつつ淀む悪の雲そのとどろきに  
燃え狂ふ戀慕の樂の斷末魔。  
遠目に濁る蒼海の色こそあかれ、  
黒潮の水脈のはたての水けぶり、  
はた、とどろ撃つ毒の砲彈、清しき喇叭、  
薄暮の朱のおびえの戦に  
疲れくるめく衰、そあ音を擽る。



黒煙またもふたすぢ。――  
序のしらべ絶えつ續きつ、いつしかに  
黒き惱の旋律ぞ渦巻き起る。  
逃げ來るは密獵船の旗じるし、  
痰き噎ぶ血と汚穢、はた憤怒  
おしなべて黄ばみ騒立つ樂の色。  
空には苦き嘲笑に雲かき亂れ、  
重りゆく煩悶のあらびはやもまた  
黒き恐怖のはたためき海より煙る。

黒煙三すぢ、五すぢ。――  
幻法のこれや苦しき脅迫  
いと淫らかに蒸し挑む疾風のもとに、  
現れて眞黒に歎く樂の船、  
生あをじろき鱧の腹ただほのぼのと、  
暮れがての赤きくるしみ、うめきこゑ、  
血の甲板のうへにまた爛れて叫ぶ  
樂慾の破片の砲彈ぞ慄ける。  
ああその空にはたためく黒き帆のかげ。



黒煙終に七すぢ。――

吹きかはす銀の喇叭もたえだえに、

渦巻き猛る樂の極、蒼海けぶり、

悪の雲とどろとどろの亂擾に

急忙しくも呪はしき夜のたたすまひ。

濡れ焙ふる水無月ぞらの日の名残

はた掻き濁し、暗澹と、あはれ黒船、

眞黒なる管絃樂の帆の響

死と悔恨の闇擾し壊れくづるる。

## 地平

あな哀れ、今日もまた銅の雲をぞ生める。

あな哀れ、明日も亦鈍き血の毒をや吐かむ。

見るからにただ熱し、心は重し。

察るだにいや苦し、愁はおもし。



かの青き國のあこがれ、  
つねに見る地平のはてに、  
大空の眞晝の色と、  
連れて弾く緑ひとつら。

その緑琴柱にはして、  
弾きなづむ鳩の羽の夢、  
幌の星劍のなげき、  
清搔はほのかに薫ゆる。

さては、日の白き恐怖に  
静かなる太鼓のとりぎ、  
晝領らす神か拊たせる、  
ころころとまたゆるやかに。

また絶えず、吐息のつらね  
かなたより笛してうかび、  
こなたより絃して消ゆる、  
ほのかなる夢のおきふし。



しかはあれ、ものなべて壓す  
 南國の熱病雲ぞ  
 猥らなる毒の謠言  
 とどろかに歌かき濁す。

おもふ、いま水に華さき、  
 野に赤き駒は斃れむ。  
 うらうへに病ましき現象  
 今日もまたとよみわづらふ。

あな哀れ、昨日の日も銅のなやみかかりき。  
 あな哀れ、明日もまた鈍き血の濁かかしむ。

聴くからにただ熱し、心は重し。  
 思ふだにいやくるし、愁は重し。

四十年十二月



ふえのね

ほのかに見ゆる青き頬、  
あな、あな、玻璃のおびゆる。

かなたにひびく笛のね、……  
青き頬ほのに消えゆく。

室にもつゝのるふえのね、……  
ふたつのにほひ盲ひゆく。

きこえずなりぬふえのね、……  
内と外とのなげかひ。

またしも見ゆる青き頬、  
あな、また玻璃のおびゆる。



下枝のゆらぎ

日はさしぬ、白楊の梢に赤く、  
さはあれど、暮れ惑ふ下枝のゆらぎ……

水の面のやはらかきにほひの嘆  
波もなき病ましさに、静みうつれる  
晩春の意閉す片側街よ、  
暮れなやむ露の内鼓をうてる。

いづこにか、もの甘き蜂の巢のこゑ。  
幼子のむれはまた吹笛鳴らし、  
白楊の岸にそひ曇り黄ばめる  
教會の硝子窓ながめてくだる。



日はのこる兩側の梢にあかく、  
さはあれど暮れ惑ふ下枝のゆらぎ……

またあれば、公園の長椅子にもたれ、  
かなたには戀慕びと苦惱に抱く。  
そのかけをのどやかに嬰兒匍ひいで  
鶯の鳥を捕らむとて岸ゆ落ちぬる。

水面なるひと騷擾、さあれ、このとき、  
驀然に急ぎくる一列の郵便馬車よ、

薄闇にほひゆく赤き曇の  
快さ、人はただ街をばながむ。

灯點る、さあれなほ梢はにほひ、  
全くいま暮れはてし下枝のゆらぎ……











雨はまたゆるにしとしと  
暮れもゆくゆめの曲節……

いづこにか鈴の音しつづ、  
近く、

はた、遠のく軋きしり、  
待ちあぐむ郵便馬車の  
旗の色見えも来なくに、  
うち曇る馬の遠嘶とほなき。

さあれ、ふと  
夕日さしそふ。  
瞬間の夕日さしそふ。

あなあはれ、  
あなあはれ、  
泣き入りぬ罌粟のひとりつら、  
最終に燃えてもちりぬ。

日の光かすかに消ゆる。







## 狂人の音楽

一一六

空気が甘し……また赤し……黄に……はた、緑……

晩夏の午後五時半の日光は暑を見せて、

蒸し暑く噴水に濡れて照りかへす。

瘋癲院の陰鬱に硝子は光り、

草場には青き飛沫の茴香酒冷えたちわたる。

いま狂人のひと群は空うち仰ふぎ—

饗宴の楽器とりどりかき抱き、自棄に、しみに、

傷つける獣のごとき雲の面

ひたに怖れて色盲の幻覺を見る。

空気が重し……また赤し……黄に……はた、緑……

\* \* \* \* \*

オボイ鳴る……また、トロムポオン……

一一七



狂ほしきギオラの唸……

一一八

一人の酸ゆき音は飛びて怜羊となり、  
ひとつは赤き顔ゑがき、笑ひわななく  
音の恐怖……はた、ほのしろき闇舞……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

セロの、喇叭の蛇の香よ、

はた、爛れ泣くギオロンの空には赤子飛びみだれ、

妄想狂のめぐりにはバツソの盲目  
小さな骸色の呪咀して逃れふためく。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

クラリネットの槍尖よ、

曲節のひらめき緩く、また急く、

アルト歌者のなげかひを暈ましなから、

一列、血しほしたたる神経の

壁の煉瓦のもとを行く……

一一九



弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

かなしみの蛇、緑の眼  
槍に貫かれてまた歎く……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

はた、吹笛の香のしぶき、  
青じろき花どくだみの鏡さに、

濁りて光る山椒魚、沼の調に音は静む。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

傷きめぐる観覧車、  
はたや、太鼓の悶絶に列なり走る槍尖よ、  
窓の硝子に火は叫び、  
月琴の雨ふりそそぐ……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……



赤き神経……盲ひし血……  
聳せる脳の鐘の音……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

\* \* \* \* \*

空氣は酸し……いま青し……黄に……なほ赤く……

はやも見よ、日の入りがたの雲の色  
狂氣の樂の音につれて波だちわたり、  
惡獸の蹠のごと血を滴す。

そがもとに噴水のむせび  
濡れ濡れて薄闇に入る……

空氣は重し……なほ赤し……黄に……また緑……

いつしかに蒸汽の鈍き船腹の



二四  
ごとくに光りかぎろひし瘋癲院も暮れゆけば、  
ただ冷えしぶく茴香酒、鋭き玻璃のすすりなき。

草場の赤き一群よ、眼ををののかし、  
躍り泣き弾きただらかす歡樂の  
はてしもあらぬ色盲のまぼろしのゆめ……  
午後の七時の印象はかくて夜に入る。

空氣は苦し……はや暗し……黄に……なほ青く……

四十一年九月

### 風のあと

夕日はなやかに、  
こほろぎ啼く。  
あはれ、ひと日、木の葉ちらし吹き荒みたる風も落ちて、  
夕日はなやかに、  
こほろぎ啼く。

四十一年八月

一二五



月の出

ほのかにほのかに音色ぞ揺る。  
かすかにひそかにほひぞ鳴る。  
しみらに列立つわかき白楊、  
その葉のくらみにこころ顫ふ。

ほのかにほのかに吐息ぞ揺る。  
かすかにひそかに雫ぞ鳴る。  
あふげばほのめくゆめの白楊、  
愁の水の面を權はすべる。

吐息のをのき、君が眼ざし  
やはらに纏れてたゆたふとき、  
光のひとすぢ——顫ふ白楊  
文月の香爐に濡れてけふる。





象印と光外

さてしもゆるけくにほふ夢路、  
したたりしたたる權のしづく、  
薄らに沁みゆく月のでしほ  
ほのかにわれらが小舟ぞゆく。

ほのめく接吻からむ頸、  
いづれか戀慕の吐息ならぬ。  
夢見てよりそふわれら、白楊、  
水上透かしてこころ顫ふ。



近世佛國繪畫の鑑賞者をわかき旅人にたとへばや。もとより Watteau の羅曼底、Corot の叙情詩は唯微かにそのおぼろげなる記憶に残れるのみ。やや暗き Fontainebleau の森より曇れる道を巴里の市街に出づれば Seine の河、そが上の船、河に臨める Café の、皆「利那」の如くしるく明かなる Manet の陽光に輝きわたれるに驚くならむ。そは Velazquez の灰色より俄に現れいでたる午后の日なりき。あはれ日はやうやう暮れてぞゆく。金縁に紅薔薇を覆輪にしたりけむ Monet の波の面も青みゆき、青みゆき、ほのかになつかしくはた悲しき Casino の夕は来る。燈の薄黄は Whistler の好みの色とぞ。月出づ。Pissarro のあなき衝を Verlaine の白月の賦など口誦みつつ過ぎゆくは誰が家の子ぞや。

太田正雄

### 消えゆく光

あわただし、旗ひるがへし、  
朱の色の驛、遞馬車跳りゆく。

曇日の色なき街は  
清水さす石油の嘘、  
驟かれ泣く停車場の鈴、溝の毒、  
晝の三味、鏡磨る歌、



茴香酒の青み泡だつ火の叫、  
絶えず眩めく白楊、遂に疲れて  
マンドリン奏でわづらふ風の群、  
あなあはれ、そのかげに乞食ゆきかふ。

くわと來り、燃えゆく旗は  
死に墮つる夏の光のうしろかげ。

灰色の亞鉛の屋根に、  
青銅の擬寶珠の錆に、

また寒き萬象の愁のうへに、  
爛れ弾く猩紅熱の火の調、  
狂氣の色と冷めがたの疲労に、今は  
ひた嘆く、悔と、惱と、戦慄と。

あかあかとひらめく旗は  
狼らなるその最終の夏の曲。

あなあはれ、あなあはれ、  
あなあはれ、光消えさる。



赤子

赤子啼く、

急き瀬の中。

壁重き女囚の牢獄、

鐵の門、

淫慾の蛇の紋章

くわとおびえ、

水に、落日に

照りかへし、

黄ばむひととき。

赤子啼く、

急き瀬の中。



暮 春

ひりあ、ひすりあ。

しゆッ、しゆッ……

なやまし、河岸の日のゆふべ、  
日の光。

ひりあ、ひすりあ。  
しゆッ、しゆッ……

眼科の窓の磨硝子、しどろもどろの  
白楊の温き吐息にくわとばかり、  
ものあたたかに、くるほしく、やはく、まぶしく。  
蒸し淀む夕日の光。  
黄のほめき。



ひりあ、ひすりあ。  
しゆッ、しゆッ……

なやまし、またも

いづこにか、

なやまし、あはれ、

音も妙に

紅き嘴ある小鳥らのゆるきさへづり。

ひりあ、ひすりあ。  
しゆッ、しゆッ……

はた、大河の鏡え濁る、河岸のまぢかを  
ざちざちと病ましげにとろろぎめぐる  
灰色黄ばむ小蒸汽の温るく、まぶしく、  
またゆるく、とろろぎ噴く湯氣  
いま懈ゆく、  
また絶えず。



ひりあ、ひすりあ。  
しゆッ、しゆッ……

いま病院の裏庭に、煉瓦のもとに、  
白楊のしどろもどろの香のかけに、  
窓の硝子に、  
まじまじと日向求むる病人は目も惱ましく  
見ぞ夢む、暮春の空と、もののねと、  
水と、にほひと。

ひりあ、ひすりあ。  
しゆッ、しゆッ……

なやまし、ただにやはらかに、くらく、まぶしく、  
また懈ゆく。

ひりあ、ひすりあ。  
しゆッ、しゆッ……



## 噴水の印象

噴水のゆるきしたたり。――  
霧しぶく苑の奥、夕日の光、  
水盤の黄なるさざめき、  
なべて、いま  
ものあまき嗟嘆の色。

噴水の病めるしたたり。――  
いづこにか病児啼き、ゆめはしたたる。  
そこここに接吻の音。  
空は、はた、  
暮れかかる夏のわななき。  
噴水の甘きしたたり。――  
そがもとに瘵つける女神の睡。  
はた、赤き眩暈の中、



冷み入る  
銀の節、雲のとどろき。

噴水の暮るるしたたり。――  
くわとぞ蒸す日のおびえ、晩夏のさけび、  
濡れ黄ばむ憂鬱症のゆめ  
青む、あな  
しとしとと夢はしたたる。



顔の印象五篇

A 精舎

うち沈む廣額、夜のごとも凹める眼――  
いや深く、いや重く、泣きしづむ靈の精舎。



それか、實に聲もなき秦皮の森のひまより  
熟視むるは暗き池谷、その水のをのき。

いづこにか薄日さし、きしりこきり鳩斑なげく

寂寥や、空の色なほ紅にほひのこれど、

静かなる、はた孤獨山間の霧にうもれて

悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まもる。

かかる間も、底ふかく青の魚盲ひあざとひ、

口そそぐ夢の豹水の面に血音たてつつ、

みな冷やき石の世と化りぞゆく、あな恐怖より。

かくてなほ聲もなき秦皮よ、秘に火ともり、

精舎また水晶と凝る時愁やぶれて

響きいづ、響きいづ、最終の靈の梵鐘。

以下四篇——四十一年三月



B 狂へる街

緒らめる暗き鼻なめらかに禿げたる額、  
瘡撃れる唇の端、光なくなやめる眼、  
なにか見る、夕榮のひとみぎり噎ぶ落日に、  
熱病の響する煉瓦家か、狂へる街か。

見るがまに焼酎の泡しぶきひたぶる歎く  
そが街よ、立てつづく尖屋根血ばみ疲れて

雲赤くもだゆる日、惱ましく馬車驅るやから  
靈のありかをぞうち惑ひ窓ふりあふぐ。

その窓に盲ひたる爺ひとり鈍き刃研げる。  
はた、唾朱に笑ひ痺れつつ女を説ける。  
次なるは聾しぬる清き尼三味線弾ける。

しかはあれ、照り狂ふ街はまた酒と歌とに  
しどろなる舞の列あかあかと淫れくるめき、  
馬車のあと見もやらず、意味もなく歌ひ倒るる。



C 醋の甕

蒼ざめし汝が面鏡えよどむ瞳のにこり、  
薄暮に熟視めつつ撓みちる髪の香きけば—  
醋の甕のふたならび人もなき室に沈みて、  
ほの暗き玻璃の窓ひややかに愁ひわななく。

外面なる嗟嘆よ、波もなきいんくの河に  
旗青き獨木舟そこはかと巡り漕ぎたみ、

見えわかぬ惱より錨曳き鎖巻かれて、  
伽羅まじり消え失する黒蒸汽笛ぞ呻める。

吊橋の灰白よ、疲れたる煉瓦の壁よ、  
たまたまに整はぬ夜のピアノ淫れさやげど、  
ひとびとは聲もなし、河の面をただに熟視むる。

はた、甕のふたならび、さこそあれ夢はたゆたひ、  
内と外かざりなき懸隔に帷墮つれば、  
あな悲し、あな暗し、醋の沈黙長くひびかふ。



D 沈丁花

なまめけるわが女、汝は弾きぬ夏の日の曲、  
惱ましき眼の色に、髮際の粉おしろひに、  
緞みたる色あかき唇に、あるはいやしく  
肉の香に倦める猥らなる頬のほほゑみに。

響かふは呪はしき執と欲、ゆめもふくらに  
頸巻く毛のぬくみ、眞白なるほだしの環

そがうへに我ぞ聴く、沈丁花たぎる畑を、  
堪へがたき夏の日を、狂ほしき甘きひびきを。

しかはあれ、またも聴く、そが畑に隣る河岸側、  
色ざめし浅葱幕しどけなく張りもつらねて、  
調ぶるは下司のうたげにはしやく曲馬の囃子。

その幕の羅馬字よ、くるしげに馬は嘶き、  
大喇叭鄙びたる笑してまたも挑めば  
生あつき色と香とひとさやぎ歎きもつる。



E 不調子

われは見る汝が不調、――萎びたる瞳の光澤に、  
衰の頬にはほふおしろひの厚き化粧に、  
あはれまた褪せはてし髪の鬢強きくゆりに、  
肉の戦慄を、いや甘き欲の疲勞を。

はた思ふ、晩夏の生あつきにほひのなかに、  
倦みしごとと連れ入るいと冷やき風の吐息を。

新開の街は錆びて、色赤く猥るる屋根を、  
濁りたる看板を、入り残る窓の落日を。

なべてみな整はぬ色の曲……ただに鋭き  
最高音の入り雑り、埃たつ家なみのうへに、  
色にぶき土藏家の江戸芝居ひとり古りたる。

露はなる日の光、そがもとに三味はなまめき、  
拍子木の歎またいと痛し古き痰に、  
かくてあな衰のものものいる空は暮れ初む。



我子の聲

われはきく、生れざる、はかりしれざる  
子の聲を、泣き訴ふ赤きさけびを。  
いづこにかわれはきく、見えわかぬかかる恐怖に。

かの野邊よ、信號柱は斷頭の臺とかがやき、  
わか葉洩る入日を浴びてあかあか遙に笑ひき。  
汽車にしてさてはきく、轢かれゆく子らの啼聲。

はた旅の夕まぐれ、榮えのこる雲の濕に、  
前世の亡き妻が墓の邊の赤埴おもひ、  
かくてまた我はきく追懷の色とにほひに、  
埋もれたる、はかりしれざる子の夢を、胎の叫を。

歸りきてわれはきく、ひたぶるに君抱くとき、  
手力のほこりも盡きて弱心なやむひととき、  
たちまちに心つらぬく  
赤き子の高き叫を。



盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光  
盲ひし沼にふりそそぎ、濁の水の  
聲もなく傷き眩む生おびえ。  
鐵の匂のひと冷み沁みは入れども、  
影うつす煙草工場の煉瓦壁。  
眼も痛ましき香のけぶり、機械とどろく。

鳴ききたる鵝鳥のうから  
しらしらと水に飛び入る。



午後六時、また噴きなやむ管の湯氣、  
壁に凭りたる素裸の若者ひとり  
腕拭き鐵の匂にうち噎ぶ。  
はた、あかあかと蒸氣鐘音なく叫び、  
そこここに咲きこぼれたる芹の花、  
あなや、しとどにおしなべて日ぞ照りそそぐ。

聲もなき鴛鳥のうから  
色みだし水に消え入る。

午後六時、鴛鳥の見たる水底は  
血潮したたる沼の面の負傷の光  
かき濁る泥の臭みに疲れつつ、  
水死の人の骨のごとちらほふなかに  
もの鈍き鉛の魚のめくるめき、  
はた浮びくる妄念の赤きわななき。  
逃げいづる鴛鳥のうから  
鳴きさやぎ汀を走る。



午後六時、あな水底より浮びくる  
 赤さわななき——妄念の猛ると見れば、  
 強き煙草に、鐵の香に、わかき男に、  
 顔いだす硝子の窓の少女らに血潮したたり、  
 歡樂の極の恐怖の日のおびえ、  
 顫ひ高まる曲節ぞ朱にくづるる。

刹那、ふと太く湯氣吐き  
 吼えいづる休息の笛。

### 青き光

哀れ、みな惱み入る、夏の夜のいと青き光のなかに、  
 ほの白き鐵の橋、洞圓き穹窿の煉瓦、  
 かげに来て米炊ぐ泥舟の鉢の撫子、  
 そを見ると見下せる人々が倦みし面も。



はた絶えず、惱ましの角光り電車すぎゆく  
河岸なみの白き壁あはあはと瓦斯も點れど、  
うち向ふ暗き葉柳震慄きつ、さは震慄きつ、  
後よりはた泣くは青白き屋の幽靈。

いと青きソプラノの沈みゆく光のなかに、  
體えて病むわかき日の薄暮のゆめ。――  
幽靈の屋よりか洩れきたる呪はしの音の  
交響體のくるしみのややありて交りおびゆる。

いづこにかうち囃す幻燈の伴奏の進行曲、  
かげのごと往來する白の衣うかびつれつつ、  
映りゆく繪のなかのいそがしさ、さは線りかへす。――  
そのかげに苦痛の暗きこゑまじりもだゆる。

なべてみな惱み入る、夏の夜のいと青き光のなかに。――  
蒸し暑き軟ら風もの甘き汗に揺れつつ、  
ほつほつと點もれゆく水の面のなやみの燈、  
鹹からき軌の譜よ……み空には星ぞうまるる。



かくてなほ惱み顔ふわかき日の薄暮のゆめ。――  
 見よ、苦き闇の洋街衢には淀みとろげど、  
 新にもしぶきいづる星の華――泡のなげきに  
 色青き酒のごと空は、はた、なべて澄みゆく。

四十一年七月

縦のふたもと

うちけぶる縦のふたもと。  
 薄暮の山の半腹のすすき原、  
 若草色の夕あかり濡れにぞ濡るる  
 雨の日のものしらべの微妙さに、  
 なやみ幽けきChopinの樂のしたたり  
 やはらかに絶えず霧するにほやかさ。  
 ああ、さはあかれ、嗟嘆の縦のふたもと。



はやにほふ樅のふたもと。  
 いつしかに色にほひゆく霧のすそ、  
 しみらに燃ゆる日の薄黄、映らふみどり、  
 ひそやかに暗き夢、弾く列並の  
 遠の山々おしなべてものやはらかに、  
 近ほとりほのめきそむる歌の曲。  
 ああ、はやにほへ、嗟嘆の樅のふたもと。  
 燃えいづる樅のふたもと。

濡れ滴る柑子の色のひとつらね、  
 深き青みの重りにまじらひけぶる  
 山の端の縋れのなやみ、あるはまた  
 かすかに覗く空のゆめ、雲のあからみ、  
 晩夏の入り日に噎ぶ夕ながめ。  
 ああ、また燃ゆれ、嗟嘆の樅のふたもと。  
 色うつる樅のふたもと。  
 しめやげる葬の曲のかなしみの  
 幽かにものなまめきに揺曳くなべに、



沈みゆく雲の青みの諧調

はた、さまざまのあこがれの吐息の薫、  
薄れつつうつらふきは日のおびえ。  
ああ、はた、響け、嗟嘆の樅のふたもと。

一六八

體え暗む樅のふたもと。

燃えのこる想のうるみひえびえと、  
はや夜の沈黙しのびねに弾きも絶え入る  
列並の山のくるしみ、ひと叢の  
柑子の霽のおぼめきも音にこそ呻け、

おしなべて御龕の空ぞ體えよどむ。  
ああ、見よ、惱む、嗟嘆の樅のふたもと。

暮れて立つ樅のふたもと。  
聲もなき悲願の通夜のすすりなき  
薄らの闇に深みゆく、あはれ、法悦、  
いつしかに筆築あかる谷のそら、  
ほのめき顔ふ月魄のうれひ沁みつつ  
夢青む忘我の原の霽の色。  
ああ、さは顔へ嗟嘆の樅のふたもと。

四十一年二月  
一六九



夕日にほひ

晩春の夕日の中に、  
順禮の子はひとり頬をふくらませ、  
濁りたる眼をあげて管うち吹ける。  
腐れゆく襪のにほひ、  
酔と石油……にじむ素足に  
落ちちれる果實の皮、赤くうすく、あるは汚なく……

片手には嚙りのこせし  
林檎をばかたく握りぬ。  
かくてなほ頬をふくらませ  
怖おづと吹きいづる……珠の石鹸よ。

さはあれど、珠のいくつは  
なやましき夕暮のにほひのなかに  
ゆらゆらと圓みつつ、ほつと消えたる。  
ゆめ、にほひ、その吐息……



彼はまた、  
怖々と、怖々と、……眩しげに頬をふくらませ  
蒸し旋む空気にぞ吹きもいでたる。

あはれ、見よ、

いろいろのかがやきに濡れもしめりて  
圓らにもものぼりゆく大きなるひとつの珠よ。  
そをいまし見あげたる無心の瞳。

背後には、血しほしたたる

拳あげ、

霞める街の大時計眺みつめたる

山門の仁王の赤き幻想……

その裏を

ちやるめらのゆく……



浴室

水落つ、たたと……浴室の眞白き湯壺  
大理石の苦惱に湯氣そたちのぼる。  
硝子の外の濁川、日にあかあかと  
小蒸気の船腹光るひとみぎり、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたと……灰色の亞鉛の屋根の  
繫留所、わが窓近き陰鬱に  
行徳ゆきの人はいま見つつ聲なし、  
川むかひ、黄褐色の雲のもと、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたと……兩國の大吊橋は  
うち煤け、上手斜に日を浴びて、  
色薄黄ばみ、はた重く、ちやるめらまじり  
忙しげに夜に入る子らが身の運び、太鼓ぞ鳴れる。



水落つ、たたと……もの甘く、あるひは赤く、  
うらわかきわれの素肌すだに沁しみみきたる  
鐵てつのほひと、腐くされゆく石いし鹼あじのしぶき。  
水面すいめんには荷足にたりの暮くれれて呼よぶ聲こゑす、太鼓たいこぞ鳴なれる。

水落つ、たたと……たたとあな音色おんしき柔ならに、  
大理石だいりしきの苦惱くなうに湯氣ゆけは濃こく、温ぬるく、  
鈍どんきどよみと外光ぐわいこうのなまめく霧きりに  
疲つかれゆく赤あかき都會とくわいのらうたげさ、太鼓たいこぞ鳴なれる。

### 入日の壁

黄きに潤うるる港みなとの入日いりひ、  
切支丹せつしたん邪宗じしゆうの寺てらの入口いりぐちの  
暗くらめるほとり、色古いろふるりし煉瓦れんがの壁かべに射やかへせば、  
静しずかに起おる日ひの祈禱いのり、  
「ハレルヤ」と、奥おくにはにはほふ讃頌さんしよくの幽ひそけき夢路ゆめぢ。



あかあかと精舎の入日。――  
 ややあれば大風琴の音の吐息  
 たゆらに嘆き、白蠟の盲ひゆく涙。――  
 壁のなかには埋もれて  
 眩暈き、素肌すはだに立てるわかうどが赤き幻まぼろし。

ただ赤き精舎しやうしゃの壁に、  
 妄念まうねんは熔とくるばかりおびえつつ  
 全身ぜんしん落つる目を浴びて眞夏まなつの海をうち眺む。

『聖マリア、イエスの御母。』  
 一齊いつせいに禮拜終らいぎやうる老若らうじやくの消え入るさけび。

はた、白しろむ入日の色に  
 しづしづと白衣はくえの人らうちつれて  
 濕潤しじゆんも暗くらき戸口とぐちより浮びいでつつ、  
 眩しくらげに數珠じゆずふりかざし急いそげども、  
 など知らむ、素肌すはだに汗あせし熔とけゆく苦惱くなうの思おもひ。

暮れのこる邪宗じやしゆの御寺みでら



いつしかに薄らに青くひらめけば  
ほのかに薫る沈の香波羅草増のゆめ。  
さしもまた埋れて顔ふ妄念の  
血に染みし睡のあたり、蟋蟀啼きもすすろぐ。

四十一年八月

### 狂へる椿

ああ、暮春。

なべて惱まし。  
溶けゆく雲のまろがり、  
大ぞらのにはひも、ゆめも。

ああ、暮春。



大理石のまぶしきにはひ—  
 幾基の墓の日向に  
 照りかへし、  
 くわと入る光。  
 ものやはき眩暈の甘き恐怖よ。  
 あかあかと狂ひいでぬる藪椿、  
 自棄に熱病む靈か、見よ、枝もたわわに  
 狂ひ咲き、  
 狂ひいでぬる赤き花、

赤き謹言。

そがかたへなる崖の上、  
 うち濕り、熱り、まぶしく、また、ねぶく  
 大路に淀むもののおと。  
 人力車夫は  
 ひとつらね青白の幌をならべぬ。  
 客を待つところどころに。

ああ、暮春。



さあれ、また、うちも向へる  
いと高く暗き崖には、  
窓もなき牢獄の壁の  
長き列、はては閉せる  
灰黒の重き裏門。

はたやいま落つる日ひびき、  
照りあかる窪地のそらの  
いづこにか、

さはひとり、  
濕り吹きゆく  
幼ごころの日のうれひ、  
そのちやるめらの  
笛の曲。

笛の曲……………

かくて、はた、病みぬる椿、  
赤く、赤く、狂へる椿。



吊橋のほひ

夏の日の激しき光  
噴きいづる銀の濃雲に照りうかび、  
雲は溶けてひたおもて大河筋に射かへせば、  
見よ、眩暈く水の面、波も真白に  
聲もなき潮のさしひき。

そがうへに懸る吊橋。

煤けたる黝の鐵の桁構、  
半月形の幾圓み絶えつつ續くかげに見よ、  
薄らに青む水の色、あるは煉瓦の  
圓柱映るひ、あかみたゆたひぬ。

銀色の光のなかに、  
そろひゆく權のなげきしらしらと、  
或は灰の水鳥のそこしもなき音のうれひ、  
河岸の水室の壁も、はた、ただに真晝の  
白蠟の冷みの沈黙。



かくてただ惱む吊橋、  
なべてみな真白き水の面、はた、光、  
ただにたゆたふ眩暈の、恐怖の、灰の哀愁の  
銀の真晝に、色重き鐵のほひぞ  
鬱憂に吊られ壓さるる。

鋼鐵のほひに噎び、  
絶えずまた直裸なる男の子  
真白に光り、ひとならび、力あふるる面して

柵の上より躍り入る、水の飛沫や、  
白金に濡れてかがやく。

真白なる真夏の真晝。  
汗滴るしとの熱に薄曇り、  
暈みて歎く吊橋のほひ目當にたぎち來る  
小蒸汽船の灰ばめる鈍き唸や、  
日は光り、煙うづまく。



硝子切るひと

君は切る、

色あかき硝子の板を。

落日さす暮春の窓に、

いそがしく撰びいでつつ。

君は切る、

金剛の石のわかさに。

茴香酒のごときひとすぢ  
つと引きつ、切りつ、忘れつ。

君は切る、

色あかき硝子の板を。

君は切る、君は切る。



悪の窓 断篇七種

一 狂念

あはれ、あはれ、  
 青白き日の光西よりのほり、  
 薄暮の灯のほひ晝もまた點りかなしむ。





わが街よ、わが窓よ、なにしかも焼酎叫び、  
鶴嘴のひとつらね日に光り悶えひらめく。

汽車ぞ来る、汽車ぞ来る、真黒げに夢とどろかし、  
窓もなき灰色の貨物輛豹ぞ積みたる。

あはれ、はや、焼酎は醋とかはり、人は轢かれて、  
盲ひつつ血に叫ぶ豹の聲遠に泡立つ。



二 疲れ

あはれ、いま暴びゆく接吻よ、肉の曲……

かくてはや青白く疲れたる獣の面  
今日もまた我見据ゑ、果敢なげに、いと果敢なげに、

色濁る窓硝子外面より呪ひためらふ。

いづこにかうち狂ふ井オロンよ、わが唇よ、  
身をも燻くべき砒素の壁夕日さしそふ。



### 三 薄暮の負傷

血潮したたる。

薄暮の負傷なやまし、かげ暗き溝のほひに、  
はた、胸に、床の鉛に……

さあれ、夢には列なめて駱駝ぞ過ぐる。

埃及のカイロの街の古煉瓦  
壁のひまには砂漠なるオアシスうかぶ。  
その空にしたたる紅きわが星よ。……

血潮したたる。



四象のほひ

日をひと日。

日をひと日。

日をひと日、光なし、色も盲ひて

ふくだめる、はた、病めるなやましきもの

窓ふたぎ窓ふたぎ氣倦るげに唸りもぞする。

あはれ、わか幽鬱の象  
亞弗利加の鈍きにほひに。

日をひと日。

日をひと日。



## 五 悪のそびら

おどろなす髪の亞麻色  
背向け、今日もうごかず、  
さあれ、また、絶えずほつほつ  
息しほり『死』にぞ吹くめる、  
血のごとき石鱗の珠を。

## 六 薄暮の印象

うまし接吻……歡語……

さあれ、空には眼に見えぬ血潮したたり、  
なにものか負傷ひくるしむ叫ぶる、  
など痛む、あな薄暮の曲の色、——光の沈黙。

うまし接吻……歡語……



七 うめき

11011

暮れゆく日、血に濁る床の上にひとりやすらふ。  
街しづみ、愈しづみ、わが心もの音もなし。

載せきたる板硝子過ぐるとき車燬きつつ  
落つる日の照りかへし、そが面噎びあかれば  
室内の汚穢はた、古壁に朽ちし鉞  
一齊に屠らるる牛の夢くわとばかり呻き悶ゆる

街の子は戯れに空虚なる乳の鐘たたき、  
よばよばの飴賣は、あなしばし、ちやるめらを次く。

くわとばかり、くわとばかり、  
黄に光る向ひの煉瓦  
くわとばかり、あなしばし。――

悪の愈畢——四十一年二月

11013



蟻

おほらかに、  
いとおほらかに、  
大きなる爵金の色の花の面。

日は真晝、  
時は極熱、  
ひたおもて日射にくわつと照りかへる。

時に、われ  
世の蜜もとめ  
雄蓋の林の底をさまよひぬ。

光の斑



燬けつ、断れつ、  
豹のごと燃えつつ、  
濕める徑の隈。

風吹かず。

仰ふげば空は

烈々と鬱金を飾ふ葎の花。

さらに、聞く、

爛れ、體えばみ、

ふつふつと苦痛をかもす蜜の息。

樂欲の

極みか、甘き

寂寞の大光明に喘ぐ時。

人界の

七谷隔て、

丁々と白檀を伐つ斧の音。



華のかげ

時は夏、血のごと濁る毒水の  
鱈住む沼の真晝時、夢ともわかず、  
日に嘆く無量の廣葉かきわけて  
ほのかに青き青蓮の白華咲けり。

ここ過ぎり街にゆく者、  
婆羅門の苦行の沙門、あるはまた  
生皮漁る旃陀羅が鈍き刃の色、  
たまたまに火の布巻ける奴隷ども  
石油の鑪を地に投げて鋭に泣けど、  
この早何時かは止まむ、これやこれ、  
饑に落ちたる天竺の末期の苦患。  
見るからに氣候風吹く空の果  
銅色のうろこ雲濕潤に燃えて



恒河の鰐の脊のごとはらばへど、  
日は爛れ、大地はあはれ、袖色の  
熱黄疽の苦痛に吐息も得せず。

この恐怖何に類へむ。ひとみぎり  
地平のはてを、大象の群御しながら  
槍揮ふ土人が、晝の水かひも  
終へしか、消ゆる後姿に代れる列は  
こは如何に、殖民兵の黒奴らが  
喘ぎ曳き来る、眞黒なる火薬の車輛

掲ぐるは危嶮の旗の朱の光  
絶えず餓ゑたる心臓の呻くに似たり。

さはあれど、ここなる華と、圓き葉の  
あはひにうつる色、匂、青みの光、  
ほのほのと沼の水面の毒の香も  
薄らに交り、晝はなほかすかに顫ふ。



幽 閉

色濁るぐらすの戸もて  
封じたる、白日の日のさすひと間、  
そのなかに蠟のあかりのすすりなき。  
いましがた、蓋閉したる風琴の忍びのうめき。  
そがうへに睡盲ひたる嬰兒ぞ戯れあそぶ。

あはれ、さは赤裸なる、盲ひなる、ひとり笑みつつ、  
聲たてて小ちく愛しき生の臍をまさぐりぬ。  
物病ましさのかぎりなる室のといきに、  
をりをりは忍び入るらむ戯けたる街衢の囃子、  
あはれ、また、嬰兒笑ふ。  
ことごとと、ひそかなる母のおとなひ  
幾度となく戸を押せど、はては敲けど、  
色濁る扉はあかす。



室の内暑く悒鬱く、またさらに嬰兒笑ふ。

二二四

かくて、はた、硝子のなかのすすりなき  
蠟のあかりの夜を待たず盡きなむ時よ。  
あはれ、また母の愁の恐怖とならむそのみぎり。

あはれ、子はひたに聴き入る、  
珍らなるいとも可笑しきちやるめらの外の一節。

四十一年六月

## 鉛の室

いんきは赤し。——さいへ、見よ、室の腐蝕に  
うちにじみ倦じつつゆくわがおもひ、  
暮春の午後をそこはかと朱をば引けども。

油じむ末黒の文字のいくつらね  
悲しともなく誦しゆけど、響らぐ聲は  
錆びてゆく鉛の悔しかすがに、

二二五



強き薫のなやましき、鉛の室は  
くわとばかり火酒のごとき噎びして  
壁の濕潤を玻璃に蒸す光の痛さ。

力なき活字ひろひの淫れ歌、  
病める機械の羽たたきにあるは沁み來し  
新らしき紙の刷られの香も消ゆる。

いんきや盡きむ。——はやもわがこころのそこに

聴くはただ體えに體えゆく句のみ、——  
はた、滓よどむ壺を見よ。つとこそ一人、

手を棚へ延すより早く、とくとくと、  
赤き硝子のいんき、體傾むけそそぐ  
一刹那、壺にあふるる火のゆらぎ。

さと燃えあがる間こそあれ、翻ると見れば  
手に平む吸取紙の骸色  
爛れぬ——あなや、血はしとと卓に滴る。





歌雅草天

このさんたくるすは三百年まへより大江村の切支  
丹のうちに忍びかくして守りつたへたるたつとき  
みくるすなり。これは野中に見いでたり。

天草島大江村天主堂秘藏

眞書

日は眞晝——野づかさの、寂寥の心の臓にか、  
ただひとつの聲もなく照りかへす硝子の破片。  
そのほとり WHISKY の匂蒸す銀色の内、  
聲するは、密かにも露吸ひあぐる、  
色赤き、色赤き花の吐息……





四十年八月、新詩社の諸友とともに遠く  
天草島に遊ぶ。こはその紀念作なり。

〔四十年十月作〕



天艸雅歌

角を吹け

わが佳耦よ、いざともに野にいでて  
歌はまし、水牛の角を吹け。



視よ、すでに美果實あからみて  
田にはまた足穂垂れ、風のまに  
山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。  
いざさらば馬鈴薯の畑を越え  
瓜哇びとが園に入り、かの岡に  
鐘やみて蠟の火の消ゆるまで  
無花果の乳をすすり、ほのぼのと  
歌はまし、汝が頸の角を吹け。  
わが佳耦よ、鐘きこゆ、野に下りて  
葡萄樹の汁滴る邑を過ぎ、

いざさらば、バアテルの黒き袈裟  
はや朝の看經はて、しづしづと  
見えがくれ棕櫚の葉に消ゆるまで、  
無花果の乳をすすり、ほのぼのと  
歌はまし、いざともに角を吹け、  
わが佳耦よ、起き來れ、野にいでて  
歌はまし、水牛の角を吹け。



ほのかなる蠟の火に

いでや子ら、日は高し、風たちて  
棕櫚の葉のうち戦ぎ冷ゆるまで、  
ほのかなる蠟の火に羽をそろへ  
鳩のごと歌はまし、汝が母も。  
好き日なり、媼たち、さらばまづ  
禱らまし讃美歌の十五番、

いざさらば風琴を子らは弾け、  
あはれ、またわが爺よ、なにすとか、  
老眼鏡ここにこそ、座はあきぬ、  
いざともに禱らまし、ひとびとよ、  
さんた・まりや。さんた・まりや。さんた・まりや。  
拜めば香爐の火身に燃えて  
百合のごとわが靈のうちふるふ。  
あなかしこ、鳩の子ら羽をあげて  
御龕なる蠟の火をあらためよ。  
黒船の笛きこゆいざさらば



ほどもなくバアテルは見えまさむ、  
さらにまた他の燭をたてまつれ。  
あなゆかし、ロレンゾか、鐘鳴らし、  
まめやかに安息の目を祝ぐは、  
あな樂し、眞白なる羽をそろへ  
鳩のごと歌はまし、わが子らよ。  
あはれなほ日は高し、風たちて  
棕櫚の葉のうち戦ぎ冷ゆるまで、  
ほのかなる蠟の火に羽をそろへ  
鳩のごと歌はまし、はらからよ。

鶯を抜けよ

はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、  
御堂にははや夕の歌きこえ、  
蠟の火もともるらし、鶯を抜けよ。  
もろもろの美果實籠に盛りて、  
汝が鳩ら畑に下り、しらしらと



歸るらし夕づつのかげを見よ。  
 われらいま、空色の帆のやみに  
 新なる大海の香爐採り  
 籠に炷きぬ、ひるがへる魚を見よ。  
 さるほどに、跪き、ひとびとは  
 目見青き上人と夜に禱り、  
 捧げます御くるすの香にや酔ふ、  
 うらうらと咽ぶらし、歌をきけ。  
 われらまた祖先らが血によりて  
 洗禮がれし假名文の御經にぞ

主よ永久に恵みおれ、われらも、と  
 鶴率つつ禱らまし、帆をしぼれ。  
 はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、  
 御堂にははや夕の歌きこえ、  
 蠟の火もくゆるらし、燭を抜けよ、



汝にささぐ

女子よ、

汝に捧ぐ、

ただひとつ。

然はあれ、汝も知らむ。

このさんたくるすは、かなた  
檳榔樹の實の落つる國、  
夕日さす白瑠瑯の石の階  
そのそこの心の心、――  
えめらるど、あるは紅玉、  
褐の埴八千層敷ける眞底より、  
汝が愛を讃へむがため、  
また、清き接吻のため、  
水晶の柄をすげし白銀の鍬をもて、  
七つほど先の世ゆ世を繼ぎて



ひたぶるに、われとわが  
探りいでし型、  
その型を  
汝に捧ぐ、  
女子よ。

ただ秘めよ

曰ひけるは、  
あな、わが少女、  
天艸の蜜の少女よ。  
汝が髪は鳥のごとく、  
汝が唇は木の實の紅に没薬の汁滴らす。  
わが鶴よ、わが友よ、いざともに擁かまし。



重濃き葡萄の酒は  
玻璃の壺に盛るべく、  
もたらしし麝香の臍は  
汝が肌の百合に染めてむ。  
よし、さあれ、汝が父に、  
よし、さあれ、汝が母に、  
ただ秘めよ、ただ守れ、齋き死ぬまで、  
虐の罪の鞭はさもあらばあれ、  
ああただ秘めよ、御くるすの愛の徴を。

さならずば

わが家の  
わが家の可愛ゆき鶴を  
その雛を  
汝せちに戀ふとしならば、



いでや子よ、  
 逃れよ、早も邪宗門外道の教、  
 かくてまた遠き祖より傳へこし秘密の聖蹟  
 とく柱より取りいでよ。もし、さならずば  
 もろもろの麝香のふくろ、  
 桂枝、はた、没薬、蘆薈  
 および乳、島の無花果、  
 如何に世のにはひを積むも、――  
 さならずば、  
 もしさならずば――

汝いかに陳じ泣くとも、あるは、また  
 護摩炷き修し、伴天連の救よぶとも、  
 ああ遂に詮業なけむ。いざさらば  
 接吻の妙なる蜜に、  
 女子の葡萄の息に、  
 いで『ころべ』いざ歌へ、わかうどよ。



嗅煙艸

「あはれ、あはれ、深江の媼よ。  
髪も頬も煙艸色なる、  
棕櫚の根に躡む媼よ。  
汝が持てる象牙の壺は  
また熏る褐なる粉は  
何ぞ。また、せちに鼻つけ

涙垂れ、あかき眼擦るは。  
このときに渡の媼  
呻ぶらく。「わが葡萄牙、  
こを嗅ぎてわかきは思ふ。  
』さらば、汝は。』責めそ、さな、さな、  
養生を骸はただ欲れ。  
さればこそ、この嗅煙艸。』



鶺鴒

わかうどなゆめ近よりそ、  
かのゆくは邪宗の鶺鴒、  
日のうちに七度八度  
潮あび化粧すといふ  
伴天連の秘の少女ぞ。  
地になびく髪には蘆薈、  
嘴にまたあかき實を塗る

淫らなる鳥にしあれば、  
絶えずその真白羽ひろげ  
乳香の水したたらす。  
されば子なゆめ近よりそ。  
視よ、持つは炎か、華か、  
さならずば實の無花果か、  
兎にもあれ、かれこそ邪法。  
わかうどなゆめ近よりそ。



日ごとに

日ごとにわかき姿して  
日ごとに歌ふわが族よ、  
日ごとに紅き寶の乳房  
日ごとにすてて漁りゆく。

黄金向日葵

あはれ、あはれ、黄金向日葵  
汝また太陽にも倦きけむ、  
南國の空の眞晝を  
かなしげに疲れて見ゆる。



一 炷

一り香か爐ろいま

一り炷すのかをり。

あはれ、火はこころのそこに。

さあれ、その

一り炷すのけむり、

かの空そらの青あおき籠かごに。

青  
き  
花



南紀旅行の紀念として、且はわが羅曼底  
時代のあえかなる思出のために、この幼  
き一章を過ぎし日の友にささぐ。

「四十年二、三兩月中作」

## 青き花

そは暗<sup>くら</sup>きみどりの空に  
むかし見<sup>ま</sup>し幻<sup>まぼろし</sup>なりき。

青き花

かくてたづねて、  
日も知らず、また、夜<sup>よ</sup>も知らず、  
國あまた巡<sup>めぐ</sup>りありきし  
そのかみの



われや、わかうど。

そののちも人とうまれて、

微妙くも奇しき幻

ゆめ、うつつ、

香こそ忘れね、

かの青き花をたづねて、

ああ、またもわれはあえかに

人の世の

旅路に迷ふ。

### 君

かかる野に

何時かありけむ。

佛手柑の青む南國

薫る日の光なよらに

身をめぐりほめく物の香、

鳥うたひ、

天もゆめみぬ。



何時の世か  
君と識りけむ。  
黄金なす髪もたわたわ、  
みかへるか、あはれ、つかのま  
ちらと見ぬ、わかき睡ひともに  
にほひぬる  
かの青き花。

### 桑名

夜となりぬ、神世に通ふやすらひに  
早や門鎖す古伊勢の桑名の街は  
路も狭に高き屋づくり音もなく、  
陰森として物の隈ひろごるにほひ。



おほらかに零落の戸を瞰下して  
愁ふるがごとく月光は青に照せり。

参宮の衆にかあらむ旅びとの  
二人三人はさきのほどひそかに過ぎぬ。  
貸旅籠札のみ白き壁つづき  
ほとほと遠く物ごゑの夜風に消えて、  
今ははた数添はりゆく星くづの  
天なる調やはらかに地は闌けまさる。

時になほ街はづれなる老舗の戸  
少し明りて火は路へひとすぢ射しぬ。  
行燈のかげには清き女の童物縫ふけはひ。  
そがなかにたわやの一人髪あげて  
戸外すかしぬ。―事もなき夜のしづけさに。



朝

—汽車のなかにて—

わが友よ、はや眼をさませ。  
玻璃の戸にのこる灯ゆらぎ、  
夜はわかきうれひに明けぬ。  
順禮はつとにめざめて  
あえかなる友をかおもふ。  
清しげの髪すがらのそよぎに  
爰おひつるのいろもほのぼの。

わが友よ、はや眼をさませ。  
かなた、いま白む野のそら、  
薔薇ききにはほのかに薄く  
堇すみよりやや濃きあはひ、  
かのわかき睡ひとみさながら  
あけぼのの夢より醒めて  
わたつみはかすかに顫ふ。



紅玉

かかるとき、  
海ゆく船に  
まどはしの人魚か蹴ける。  
美しくしき術の夕に、  
まどろみの香油したたり、

こころまた  
けぶるともなく、  
幻の黒髪きたり、  
夜のごとも  
わが眼蔽へり。  
そことなく  
おほくのひとの  
あえかなるかたらひおぼえ、  
われはただひしと凝視めぬ。



夢ふかき黒髪くろかみの奥おく  
 朱しゆに喘あはぐ  
 紅玉こうぎよくひとつ、  
 これや、わが胸より落つる  
 わかき血ちの  
 燃もる滴したたり

### 海邊の墓

われは見き、  
 いつとは知らね、  
 薄うすあかるにほひのなかに  
 夢ゆめならずわかれし一人ひとり、  
 ものみなは涙なみだのいろに



消えぬとも。  
ああ、えや忘る。  
かのわかき黒髪のなか、  
星のごと濡れてにほひし  
天色の勾玉七つ。

われは見ぬ、  
漂浪ひながら、  
見もなれぬ海邊の墓に  
うつつにも眠れる一人

そことなき髪のにほひの  
ほのめきも、  
ああ、えや忘る。  
いま寒き夕闇のそこ、  
星のごと濡れてにほへる  
天色の露草七つ。



渚の薔薇

紀の南、白良の渚、  
荒き灘高く碎けて  
天暗う轟くほとり、  
ひとならび夕陽をうけて  
面ほてり、むらがり咲ける  
色紅き薔薇の族よ。  
瞬く間、間近に寄せて

崩れうつ浪の穂を見よ。  
今しさと滴るばかり  
激瀾の飛沫に濡れて、  
彌さらし匂ひ閃めく  
火のごとき少女のむれよ。  
寄せ返し、遠く消えゆく  
鹽漚の暗き音を聴け。  
ああ薔薇、汝にむかへば  
わかき日のほこりぞ躍る。  
薔薇、薔薇、あてなる薔薇。



紐

海の霧にほやかなるに  
灯も見ゆる夕暮のほど、  
ほのかなる旅籠の窓に  
在るとなく暮れもなやめば、  
やはらかき私語まじり  
咽びきぬ、そこはかとなく、  
火に焼くる薔薇のほひ。

ああ、薔薇、暮れゆく今日を  
そぞろなり、わかき喘に  
圖らずも思ひぞいづる。  
そは熱き夏の落邊、  
濡髪のままめかしさに、  
女つと寝がへりながら  
みだらなる手して結びし  
色紅き靴の紐。



書

蜜柑船風にうかびて  
壁白き濱のかなたは  
あたたかに物賣る聲す。  
波もなき港の真晝、  
白銀の挿櫛撓み

いま遠く二つら三つら  
水の上をすべると見つれ。  
波もなき港の真晝、  
また近く、二つら三つら  
飛の魚すべりて安し。



夕

あたたかに海は笑ひぬ。  
花あかき夕日の窓に、  
手をのべて聴くとしもなく  
薔薇摘み、ほのかに愁ふ。  
いま聴くは市の遠音か、  
波の音か、過ぎし昨日か、  
はた、淡き今日のうれひか。

あたたかに海は笑ひぬ。  
ふと思ふ、かかる夕日に  
水色の絹衣ゆるがせ、  
いまあてに花摘みながら  
かく愁ひ、かくや聴くらむ、  
紅の南極星下  
われを思ふ人のひとりも。





酒 古

羅曼底の瞳

この少女はわが稚きロマンチックの幻象也、假にソフィヤと呼びまゐらす。

美<sup>う</sup>くしきソフィヤの君<sup>きみ</sup>。  
悲<sup>かな</sup>しくも戀<sup>こひ</sup>しくも見え給ふわがわかきソフィヤの君<sup>きみ</sup>。  
なになれば日もすがら今日<sup>けふ</sup>はかく眼<sup>め</sup>目<sup>め</sup>り給ふ。  
美<sup>う</sup>くしきソフィヤの君<sup>きみ</sup>、  
われ泣<sup>な</sup>げば、朝<sup>あ</sup>な夕<sup>ゆ</sup>なに、  
悲<sup>かな</sup>しくも靜<sup>しず</sup>かにも見<sup>み</sup>ひらき給ふ青<sup>あお</sup>き華<sup>はな</sup>——少女<sup>をとめ</sup>の瞳<sup>ひとみ</sup>。  
ソフィヤの君<sup>きみ</sup>。



こは邪宗門の古酒なり。近代白耳義の所謂フアンドシエ  
ルの神經には柑桂酒の酸味に豎笛の音色を思ひ浮かべ梅酒  
に喇叭を嗅ぎ、甘くして辛き茴香酒にフルウトの鋭さをたづ  
ね、あるはまたウヰスキイをトロムボオンに、キユムメル、ブラ  
ンテイを幽曉として鼻音を交へたるオボイの響に配して、そ  
れそれ句強き味覺の合奏に耽溺すと云へど、こはさる驕りた  
る類にもあらず。敵くさき穴倉の隅、曇りたる色硝子の窓より  
洩れきたる外光の不可思議におぼめきながら、煤びたるフラ  
スコのひとつに湛ゆるは火酒か、阿刺吉か、又はかの紅毛の醜  
醜の酒か、えもわかれど、われはただ和蘭わたりのびいどろの  
深き古色をゆかしみつつ、かのわかき日のはじめに秘め置き  
にたる様々の夢と匂とに執するのみ。

### 戀慕ながし

春ゆく市のゆふぐれ、  
角なる地下室の玻璃透き  
うつらふ色とにほひと  
見惚れぬ。潤るむ笛の音。



しばしは雲の縹と、  
灯うつる路の濡色、  
また行く素足しらしら、  
あかりぬ、笛の音色も。

古き醋甕と街衢の  
物焼く薫いつしか  
薄らひ籠ゆれ。—澄みゆく  
紅き音色の揺曳。

このとき、玻璃も眞黒に  
四輪車軋るはためき、  
獣の温き肌の香  
過ぎりぬ。—濁る夜の色。

ああ眼にまどふ音色の  
はやも見わかぬかなしさ。  
れんほ、れれつれ、消えぬる  
戀慕ながしの一曲。



煙 草

黄のほてり、夢のすががき、  
さはあまきうれひの華よ。  
ほのに汝を嗅ぎゆくこころ、  
QUIRACAOの酒もおよばじ。

いつはあれ、ものうき胸に  
痛知るささやきながら、  
わかき火のほひにむせて  
はばたきぬ、快樂の鳥は。

そのうたを誰かは解かむ。  
あえかなる罪のまぼろし、—  
濃き華の裾に沁みゆく  
愛欲の千々のうれひを。



向日葵ひるまきの日に蒸すにほひ、  
かはたれのかなしき怨言うらみご  
ゆるやかにくゆりぬ、いまも  
絶間たえまなき火のささやきに。

かくてわがころひねもす  
傷いたむともなくてくゆりぬ、  
あな、あはれ、汝なが香かの小鳥  
そらいろのもやのつばさに。

舗 石

夏の夜あけのすすしき、  
氷載せゆく車の  
いづちともなき軋さしりに、  
潤うるみて消ゆる瓦斯がすの火。



海へか、路次ゆみだれて  
 大族なす鴛の鳥  
 鳴きつれ、霧のまがひに  
 わたりぬ——しらむ舗石。  
 人みえそめぬ。煙草の  
 ただよひ濕るたまゆら、  
 辻なる窓の繪硝子  
 あがりぬ——ひびく舗石。

見よ、女が髪のたわめき  
 濡れこそかかれ、このとき、  
 つと寄り、男みだらの  
 接吻——にほふ舗石。

ほど經て窓を閉す音。  
 枝垂柳のしげみを、  
 赤き港の自働車  
 けたたましくも過ぎぬる。



ややあり、ほのに緋の帯、  
水色うつり過ぐれば、  
縫れぬ、はやも、からころ、  
かるき木履のすががき。

### 驟雨前

長月の鎮守の祭、  
からうじてどよもしながら、  
雨もよひ、夜もふけゆけば、  
蒸しなやむ濃き雲のあし  
をりをりに赤くただれて、  
月あかり、稻妻すなる。



このあたり、だらだらの坂、  
赤楊高き小學校の  
柵盡きて、下は黍畑  
こほろぎぞ闇に鳴くなる。  
いづこそや女聲して  
重たげに雨戸繰る音。

わかれ路、辻の濃霧は  
馬やどののこるあかりに  
幻燈のぼかしのごとも

蒸し青み、破れし土馬車  
ふたつみつ泥にまみれて  
ひそやかに影を落しぬ。

泥濘の物の汗ばみ  
生ぬるく、重き空氣に  
新しき木犀まじり、  
馬槽の臭氣ふけつつ、  
懶うげのさやぎはたはた  
暑き夜のなやみを刻む。



足音す、生血の滴り  
しとしととまへを人か  
おちうどか、はたや、六部か、  
背に高き龜をになひ、  
青き火の消えゆくごとく  
呻きつつ闇にまぎれぬ。

生騒ぎ野をひとわたり。  
とある枝に蟬は寝おひれ、  
ちと嘆き、鳴きも落つれば

洞圓き橋臺のをち、  
はつかにも断れし雲間に  
月黄ばみ、病める笑ひす。

夜の汽車の重きとどろき。  
凄まじき驟雨のまへを、  
黒烟深き峽は  
一面に血潮ながれて、  
いま赤く人轢くけしき。  
稻妻す。―嗚呼夜は一時。



解 纜

解纜す、大船あまた。——  
 ここ肥前長崎港のただなかは  
 長雨ぞらの幽闇に海づら鈍み、  
 悶々と櫓けぶるたたずまひ、  
 鎖のむせび、帆のうなり、傳馬のさけび、  
 あるはまた阿蘭船なる黒奴が  
 氣も狂ほしき諸ごゑに石炭積むしぐさ

うち濕り——嗚呼午後七時——ひとしきり、落居ぬ騷擾。

解纜す、大船あまた。

あかあかと日暮の街に吐血して

落日喘ぐ寂寥に鐘鳴りわたり、

陰々と灰色重き曇日を

死を告げ知らすせはしさに、響は絶えず

天主より。——闇澹として二列、

海波の嗚咽、赤の浮標、なかに黄ばめる

帆は瘡に——嗚呼午後七時——わなわなとはためく恐怖。



解纜す、大船あまた。——  
黄髮の伴、天連信徒踰跲と  
闇穴道を磔負ひ驅られゆくごと  
生ぬるき悔の唸順々に、  
流るる血しほ黒煙り動揺しつつ、  
印度はた南蠻羅馬、目的はあれ、  
ただ生涯の船がかり、いづれは黄泉へ  
消えゆくや、——嗚呼午後七時——鬱憂の心の海に。

三十九年七月

### 日ざかり

嗚呼、今し午砲のひびき  
おほどかにとどろきわたり、  
遠近の汽笛しばらく  
饑うるごと呻きをはれば、  
柳原熱き街衢は  
また、もとの沈黙にかへる。



河岸なみは赤き煉瓦家。  
 牢獄めく工場の奥ゆ  
 印刷の響ひびきたまたま  
 薄鉄葉切はくせんる鉄の音おとと。  
 枢ひつぎうつ槌と、鑢つりと。  
 懶もろうげにまじりきこえぬ。

片側の古衣屋つづき、  
 衣紋掛重おんかひき恐怖おそれに  
 肺はひやみの吐洩しゃくれて、

饑えてゆく物のいきれに、  
 陰濕いんじつのほひつめたく  
 照り白み、人は黙坐もくざす。

ゆきかへり、やをら、電気車  
 鉛なまきだつ體をとどめて  
 ぐどぐどとかたみに語り、  
 鬱憂うつろの唸重うなりげに  
 また軋きる、熱く垂れたる  
 ひた赤あかき満員まんがんの札た。



恐ろしき沈黙ふたたび  
酷熱の日ざしにただれ、  
べんき塗褪めし看板  
毒滴らし、河岸のあちこち  
ちぢれ毛の瘦犬見えて  
苦しげに肉を求食りぬ。

油うく線路の正面、  
鐵重き橋の構に

雲ひとつまるがりいでて  
くらくらとかがやく眞晝、  
汗ながし、車曳きつつ  
匍匐ふがごと撒水夫きたる。



軟 風

ゆるびぬ、潤む罌粟の火は  
わかき瞳の濡色に。  
熟視めよ、ゆるる麥の穂の  
たゆらの色のつぶやきを。

たわやになびく黒髪の  
君の水脈こそ身に翻れ。――  
うかびぬ、消えぬ、火の雫、  
匂の海のたゆたひに。

ふとしも歎く蝶のむれ  
ころりんころと……頬のほめき、  
觸るる吐息に纏るれば、  
色も、にほひも、つぶやきも、



同じ音色の搖曳に  
倦じぬ、かくて君が目も。――  
あはれ、皁月の軟風に  
ゆられてゆめむわがおもひ。

四十年六月

# 大寺

大寺の庫裏のうしろは、  
枇杷あまた黄金たわわに  
六月の天いろ渡る  
路次の隅、竿かけわたし  
皮交り、襪襪を乾せり。



そのかけに穢き姿して  
面子うち、子らはたはぶれ、  
裏店の洗流の日かけ、  
顔青き野師の女房ら  
首いだし、煙草吸ひつつ、  
鈍き目に蕈あふぎて、  
はてもなう罵りかはす。  
凋れたるものにほひは  
溝板の臭氣まじりに  
蒸し暑く、いづこともなく。

赤黒き肉屋の旗は  
屋根越に垂れて動かす。  
はや十時、街の沈黙を  
しめやかに沈の香しづみ、  
しらじらと日は高まりぬ。



ひらめき

十月のとある夜の空。  
北國の郊野の林檎  
實は赤く梢にのこれ、  
はや、里の果物採は  
影絶えぬ、遠く灯つけて  
ただ軋る耕作ぐるま。

鬱憂に海は鈍みて  
闇澹と氷雨やすらし。  
灰濁める暮雲のかなた  
血紅の火花ひらめき  
燦として音なく消えぬ。  
沈痛の呻吟この時、  
闇重き夜色のなかに  
蓬髪の男踏跟き  
落涙す、蒼白き頬に。



立 秋

憂愁のこれや野の國、  
柑子だつ灰色のする  
夕汽車の遠音もしづみ、  
信號柱のちさき燈  
淡々とみどりにうるむ。  
ひとしきり、小野に細雲。

南瓜畑北へ練りゆく  
旗赤き異形の列は  
戯けたる廣告の囃子  
賑やかに遠くまぎれぬ。  
うらがなし、落日の黄金  
片岡の槐にあかり、  
鳴きしきる蛸あはれ  
誰葬るゆふべなるらむ。



玻璃饅

うすぐらき窖あなぐらのなか、  
瓢ひき状じょうなにか湛たへて、  
十とあまり圓まうならべる  
夢ゆめいろの薄うすら玻璃饅。

静しずけさや、露つゆの古ふるびを  
黄わう蠟ろうは燻くもりまどかに

照ありあかる。吐と息いきそこ、ここ、  
哀あ樂らくのつめたきにほひ。

今いましこそ、ゆめの歡くわん樂らく  
降ふりそそげ。生いのち命めいの脈なまは  
ゆらぎ、かつ、壁かべにちらほら  
玻は璃り透すきぬ、赤あかき火かの色いろ。



微笑

朧月か、眩ゆきばかり  
髪むすび紅き帯して  
あらはれぬ、春夜の納屋に  
いそいそと、あはれ、女子。

あかあかと据ゑし蠟燭  
薔薇潮す片頬にほてり、  
すすろけば夜霧火のごと、  
いづこにか林檎のあへぎ。

嗚呼、愉快、朱塗の樽の  
差口抜き、酒つぐわかさ、  
玻璃器には葡萄の薫  
なみなみと……遠く人ごゑ。



やや暫時、睡かがやき、  
髪かしげ、微笑みながら  
なに紅む、わかき女子。  
母屋にまた、おこる歡語……

三十九年八月

## 砂道

日の眞晝、ひとり、懶く  
眞白なる砂道を歩む。  
市遠く赤き旗見ゆ、  
風もなし。荒蕪地つづき、  
廢れ立つ礎燃えて



烈々と煉瓦の火氣に  
爛れたる果實のほひ  
そことなく漂ひ濕る。

數百歩、娑婆に音なし。

ふと、空に苦熱のうなり、  
見あぐれば、名しらぬ大樹  
千萬の羽音に塵け、  
鈴狀に熟るる火の粒

潤やかに甘き乳しぶく。  
樂欲の渴たちまち  
かのわかき接吻思ひ、  
目ぞ暈む。

眞夏の原に  
眞白なる砂道とざれて  
また續く恐怖の日なか、  
寂として過ぎる人なし。



凋落

寂光土、はたや、墳塋、  
夕暮の古き牧場は  
なごやかに光黄ばみて  
うつらちる楡の落葉、  
そこ、かしこ。—暮秋の大日  
あかあかと海に沈めば、  
凋落の市に鐘鳴り、  
絡繹と寺門をいづる

老若の力なき顔、  
あるはみな青き旗垂れ  
灰濁める水路の靄に  
寂寞と繋る猪木舟、  
店々の装飾まばらに、  
登石ちらほら軋る  
空ぐるま、寒き石橋。—  
鈍き眼に頭もたげて  
黄牛よ、汝はなにおもふ。



晩秋

神無月、下浣の七日、  
病ましげに落日黄ばみて  
晩秋の乾風光り、  
百舌啼かず、木の葉沈まず、

空高き柿の上枝を  
實はひとつ赤く落ちたり。  
刹那、野を北へ人霊、  
鉦うちぬ、遠く死の歌。  
君死にき、かかる夕に。



あかき木の實

暗きころのあさあけに、  
あかき木の實ぞほの見ゆる。  
しかはあれども、晝はまた  
君といふ目にわすれしか。  
暗きころのゆふぐれに、  
あかき木の實ぞほの見ゆる。

四十年十月

かへりみ

みかへりぬ、ふたたび、みたび、  
暮れてゆく歩のころ  
なに惜みさしもたゆたふ。  
あはれ、また、野邊の番紅花  
はやあかきにほひに満つを。

四十年十二月



なわすれぐさ

面<sup>おもて</sup>帕<sup>は</sup>のうらにしのびて、  
その眸<sup>まゆ</sup>すすり泣くかど、  
空<sup>そら</sup>いろの、薄<sup>うす</sup>き葉<sup>は</sup>かげに  
今<sup>け</sup>日も咲<sup>さ</sup>く、なわすれの花<sup>はな</sup>。

四十一年五月

三一四

わかき日の夢

水<sup>みづ</sup>透<sup>す</sup>ける玻<sup>は</sup>璃<sup>り</sup>のうつはに、  
果<sup>み</sup>のひとつみづけるごとく、  
わが夢<sup>ゆめ</sup>は燃<sup>も</sup>えてひそみぬ。  
ひややかに、きよく、かなしく。

四十一年五月

三一五



ふひやみ

うらわかきうたびとのきみ、  
よひやみのうれひきみにも  
ほの沁むや、青みやつれて  
木のもとに、みればをみなも。  
な怨みそ。われはもくせい、  
ほのかなる花のさだめに、

目見<sup>ま</sup>し<sup>み</sup>らみ、うすらなやめば  
あまき香<sup>か</sup>もつゆにしめりぬ。  
さあれ、きみ、こひのうれひは  
よひのくち、それもひととき、  
かなしみてあらばありなむ、  
われもまた。―月はのぼれり。



一 警

大月は赤くのほれり。  
あら、青む最愛びとよ。  
へだてなき戀の怨言は  
見るが間に朽ちてくだけぬ。  
こは人か、

何らの色ぞ、  
凋落の鶴か、花か。  
後より、  
冷笑す、あはれ、一瞥。  
我、こころ君を殺しき。



旅情

——さすらへるミラノひとのうた。

零落の宿泊はやすし。

海ちかき下層の小部屋は

ものしなき鹹の汚ぐれに、

煤けつつ匂ふ壁紙。

廣重の名をも思出づ。

ほどこちかき庖厨のほてり、

繪草子の匂にまじり  
物あふる騒ぎこもこも、  
焼酎のするどき吐息  
針のごと肌刺す夕。

ながむれば葉柳つづき、

色硝子濡るる巷を、

横濱の子が智慧のはやさよ、

支那料理よひの灯影に

みだらうたあはれに歌ふ。



ややありて月はのぼりぬ、  
清らなる出窓のしたを  
からころと軋む櫓の音。  
鐵格子ひしとすがりて  
黄金髪わかきをおもふ。  
數おほき罪に古りぬる  
初戀のうらはかなさは  
かかる夜の黒き波間を

舟かせぎ、わたりさすらふ  
わかうどが歌にこそきけ。

色ふかきミラノのそらは  
日本のそれと似たれど、  
ここにして摘むによしなき  
素馨、海のあなたに  
接吻のかなしきもあり。

國を去り、昨にわかれて



逃れ來し身にはあれども、  
なほ遠く君をしぬべば、  
ほうほう……と笛はうるみて、  
いづらへか、黒船きゆる。

廊下ゆく重き足音。

みかへれば暗きひと間に  
残る火は血のごと赤く、  
腐れたる林檎のにはひ、  
そことなく涙をさそふ。

柑子

蕭やかにこの日も暮れぬ、北國の古き旅籠屋。  
物焙ぶる爐のほとり頸垂れ愁ひしづめば  
漂浪の暗き山川そこはかと。——さあれ、密かに  
物ゆかし、わかき匂のいづこにか濡れてすすろぐ。



女あるじは柴折り燻べ、自在鍵低くすべらし、  
鍋かけぬ。赤ら顔して旅語る商人ふたり。  
傍より、笑みて静かに籠なる木の實撰りつつ、  
家の子は卓にならべぬ。そのなかに柑子の匂。

ああ、柑子、黄金の熱味嗅ぎつつも思ひぞいづる。  
晩秋の空ゆく黄雲、畑のいろ、見る眼のどかに  
夕風の沖に帆あぐる蜜柑ぶね、暮れて入る汽笛。  
温かき南の島の幼子が夢のかずかず。

また思ふ、柑子の店の愛想よき肥満たる主婦、  
あるはまた顔もかなしき亭主の流す新内、  
暮れゆけば紅き夜の灯に蒸し薫ゆる物の香のなか、  
夕餉時、街に入り来る旅人がわかき歩みを。

さては、われ、岡の木かげに夢心地、在りし静けさ  
忍ばれぬ。目籠擁へ、黄金摘み、袖もちらほら  
鳥のごと歌ひさまよふ君ききて泣きにし日をも。――  
ああ、耳に鈴の清しき、鳴りひびく沈黙の聲音。



柴はまた音して爆せぬ、燃えあがる炎のわかさ。  
ふと見れば、鍋の湯けぶり照り白らむ薫のなかに、  
箸とりて笑らぐ赤ら頬、夕餉盛る主婦、家の子、  
皆、古き喜劇のなかの姿なり。涙ながるる。

三十九年五月

## 内陣

ほのかなる香爐のくゆり、  
日のにほひ、燈明のかげ、――

文月のゆふべ、蒸し薫る三十三間堂の奥  
空色しづむ内陣の闇ほのぐらき静寂に、



千一<sup>せんいち</sup>體<sup>たい</sup>の觀<sup>くわん</sup>世<sup>せ</sup>音<sup>おん</sup>かさなり立たす香<sup>か</sup>の古<sup>こ</sup>び  
いと蕭<sup>しょう</sup>やかに後<sup>こう</sup>背<sup>はい</sup>のにおき列<sup>つらね</sup>ぞ白<sup>しろ</sup>みたる。

いづちとも、いつとも知らに、  
かすかなる素<sup>す</sup>足<sup>あし</sup>のしめり。

そと軋<sup>き</sup>むゆめのゆかいた  
なよらかに、はた、うすらかに。

ほのめくは髪<sup>かみ</sup>のなよびか、

衣<sup>き</sup>の香<sup>か</sup>か、えこそわかたね。

女<sup>をんな</sup>子の片<sup>かた</sup>頬<sup>ほ</sup>のしらみ  
忍<sup>しの</sup>びかの息<sup>いき</sup>の香<sup>か</sup>ぞする。

舞<sup>ま</sup>ごろも近<sup>ちか</sup>づくなべに、  
うつらかにあかる薄<sup>うす</sup>闇<sup>やみ</sup>。

初<sup>はつ</sup>戀<sup>こひ</sup>の燃<sup>も</sup>ゆるためいき、  
帯<sup>おび</sup>の色<sup>いろ</sup>、身<sup>み</sup>内<sup>うち</sup>のほてり。



だいらの姿おぼろかになまめき薫ゆる舞姫の  
ほのかに今したたすめば本尊佛のうすあかり  
静かなること水のごと沈みて匂ふ香のそらに、  
仰ぐともなき目見のゆめやはらに涙さそふ時。

薨より鶴か立ちけむ、  
はたはたとゆくりなき音に。

ふとゆれぬ、長の振袖

かろき緋のひるがへりにぞ、  
ほのかなる香爐のくゆり、  
日のにほひ、燈明のかけ、――  
もろもろの光はもつれ、  
あな、しばし、闇にちらばふ。



懶き島

明けぬれどもうし。温き土の香を  
軟風ゆたにただ懈く揺り吹くなべに、  
あかがねの淫の夢ゆのろのろと  
寝恍れて醒むるさざめ言、起つものうし。

眺むれどもうし、のぼる日のかげも、  
大海原の空燃えて、今日も緩ゆる  
縦にのみ湧くなる雲の火のはしら  
重げに色もかはらねば見るものうし。  
行きぬれどもうし、波のたくりも、  
懈たき砂もわが惱ものうければぞ、  
信天翁もそろもそろの吐息して  
終日うたふ挽歌きくものもうし。



寝そべれどもうし、圓に屯して  
正覺坊の痴ごこち、日を嗅きながら  
女らとなすこともなきたはれごと、  
かくて拖けど、飽きぬれば吸ふものうし。

貪れどもうし、椰子の實の酒も、

あか裸なる身の倦るさ、酌めども、あはれ、  
懈怠の心の欲のものうげさ。  
遠雷のとどろきも晝はものうし。

暮れぬれどもうし、甘き髪かの香も、  
益なし、あるは木を擦りて火ともすわざも。  
空腹の心は暗きあなぐらに  
峻のうねりのにはひなし、入れどもうし。

ああ、なべてものうし、夜はくらやみの  
濁れる空に、熟みつはり落つる實のごと  
流星血を引き消ゆるなやましさ。  
一人ならねど、とろにとろ、寝れどもうし。



灰色の壁

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

臘月の十九日、

丑満の夜の館。

龜めく唐銅の櫃の上、

燭青うまじろがすひとつ照る。

時にわれ、朦朧と黒衣して

天鵝絨のもの鈍き床に立ち、

ひたと身は鐵の屑

磁石にか吸はれよる。

足はいま釘つけに痺れ、かの

黄泉の扉はまのあたり額を壓す。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。



暗澹と燐の火し  
奈落へか虚する。  
表面ただ古地圖に似て煤け、  
縦横にかす知れず走る罅  
青やかに火光吸ひ、じめめと  
陰湿の汗うるみ冷ゆる時、  
鐵の氣はうしろより  
さかしまに髪を梳く。  
はと疎む節々の凍る音。  
生きたるは黒漆の腫のみ。

灰色の暗き壁、見るはただ  
恐ろしき一面の壁の色。  
熟視む、いま、あるかなき  
一點の血の雫。  
朱の鈍み星のごと潤味帯び  
光る。聞く、この暗き壁ぶかに  
くれなるの鼓うつ心の臆  
刻々にあきらかに熱り來れ。  
血けぶり。刹那ほと



かすかなる人の息。  
みるがまに罅はみなつやつやと  
金髪きんぱつの千筋ちぢんなし、さと亂る。

灰色の暗き壁、見るはただ  
恐ろしき一面の壁の色。  
なほ熟視じゅつしむ。……髻むすぶと  
浮うびいづ、女の頬ほ  
大理石だいりしのごと腐れ、仰向うやうくや  
鼻冷はなひやえてほの笑わらふちひさき齒

しらしらと薄玻璃うすはりの音を立つる。  
眼めをひらく。絶望ぜつぼうのくるしみに  
手はかたく十字じゅうじ拱こまみ、  
みだらなる媚こぼの色  
きとばかり。燭しやくの火の青み射し、  
銀色ぎんいろの夜の絹衣きぬえひるがへる。  
灰色はいいろの暗くらき壁、見るはただ  
恐ろしき一面いっめんの壁かべの色。  
『彼。』とわが憎惡にくしみ心



ひらむらとうちふるふ。  
一齊に冷血のわななきは  
釘つけの身を逆にるぐり刺す。  
ぎくと手は音刻み、節ごとに  
機械のごと動く。いま怪し、  
おぼえあるくらがり  
落ちちれる埴と饅。  
つと取るや、ひとつ當て、左より  
額をまづひしひしと塗りつぶす。

灰色の暗き壁、見るはただ  
恐ろしき一面の壁の色。  
朱のごとき怨念は  
燃え、われを凍らしむ。  
刹那、かの驕りたる眼鼻ども  
胸かけて、生ぬるき埴の色  
ひと息に饅の手に葬られ  
生きながら苦しむか、ひくひくと  
うち皺む壁の罅、  
今、暗き他界より



凄きまで面變り、人と世を  
呪ふにか、すすりなき、うめきごる。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

悪業の終りたる

時に、ふとわれの手は

物握るかたちして見出さる。

ながむれば埴あらず、鏝もなし。

ただ暗き壁の面冷々と

うは濕り、一點の血ぞ光る。

前の世の戀かなほ

骨髓に沁みわたる

この怨恨、この呪咀、まざまざと

人ひとり幻影に殺したる。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

臘月の十九日、

丑満の夜の館。



龜<sup>かめ</sup>めく唐銅<sup>からどう</sup>の櫃<sup>ひら</sup>の上<sup>うへ</sup>  
 燭<sup>しよく</sup>青<sup>あお</sup>うまじろがすひとつ照<sup>て</sup>る。  
 時<sup>とき</sup>になほ臙<sup>やう</sup>臙<sup>やう</sup>と黒<sup>くろ</sup>衣<sup>え</sup>して  
 天<sup>てん</sup>鵝<sup>が</sup>絨<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>もの<sup>の</sup>に<sup>に</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>き<sup>き</sup>床<sup>とこ</sup>に<sup>に</sup>立<sup>た</sup>ち、  
 わ<sup>わ</sup>な<sup>な</sup>わ<sup>わ</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>壁<sup>かべ</sup>熟<sup>じやく</sup>視<sup>し</sup>め、  
 ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>り、<sup>また</sup>戦<sup>せん</sup>慄<sup>りやく</sup>す。  
 掌<sup>て</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>ば<sup>ば</sup>汗<sup>あせ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>生<sup>なま</sup>な<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と  
 さ<sup>さ</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>人<sup>たんにん</sup>間<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>血<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>に<sup>に</sup>ほ<sup>ほ</sup>ひ。

三十九年十二月

### 失くしつる

失<sup>な</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>る。  
 さ<sup>さ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>ね。  
 ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>日<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>は、  
 探<sup>さが</sup>し<sup>し</sup>な<sup>な</sup>ば、<sup>な</sup>ほ<sup>ほ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ご<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>。  
 色<sup>いろ</sup>青<sup>あお</sup>き<sup>き</sup>真<sup>まこと</sup>珠<sup>たまご</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>よ。

四十一年七月



邪宗門目次

麻 醉

邪宗門秘曲……………一

室内庭園……………四

陰影の瞳……………八

赤き僧正……………一〇

WHISKY……………一三

天鵝絨のほひ……………一四

濃 霧……………一七

赤き花の麻酔……………二二

参 の 香……………二四

曇 日……………二五

畢



秋の瞳	三〇
空に真赤な	三二
秋のをほり	三三
十月の顔	三六
接吻の時	三九
濁江の空	四三
寢國のたそがれ	四六
蜜の室	四九
囀	五二
鈴の音	五四
夢の奥	五八
意	六二
昨日と今日と	六三

わかき日	六四
朱の伴奏	

謀叛	六五
こほろぎ	六八
序樂	七四
納會利	七八
ほのかにひとつ	八二
耽溺	八五
といき	九〇
黒船	九二
地平	九七
ふえのれ	一〇二



下枝のゆらぎ……………一〇四  
 雨の日ぐらし……………一〇八  
 狂人の音楽……………一一六  
 風のあと……………一二五  
 月の出……………一二六

外光と印象

消えゆく光……………一二九  
 赤子……………一三二  
 暮春……………一三四  
 噴水の印象……………一四〇  
 顔の印象……………一四三  
 A 檜舎……………一四三

B 狂へる街……………一四六  
 C 醋の甕……………一四八  
 D 洗丁花……………一五〇  
 E 不調子……………一五二  
 我子の聲……………一五四  
 盲ひし沼……………一五六  
 青き光……………一六一  
 礎のふたもと……………一六五  
 夕日にほひ……………一七〇  
 浴室……………一七四  
 入日の壁……………一七七  
 狂へる椿……………一八一  
 吊橋のほひ……………一八六



硝子切るひと……………一九〇

悪 の 窟……………一九二

一 狂 念……………一九二

二 疲 れ……………一九四

三 薄暮の負傷……………一九六

四 象のほひ……………一九八

五 悪のそびら……………二〇〇

六 薄暮の印象……………二〇一

七 う め き……………二〇二

蟻……………二〇四

華 の かけ……………二〇八

幽 閉……………二一一

館 の 室……………二一五

眞 晝……………二一八

天艸雅歌

角を吹け……………二一九

ほのかなる蠟の火に……………二二二

鱗を抜けよ……………二二五

汝にささぐ……………二二八

ただ秘めよ……………二三一

さならすば……………二三三

嗅多煙 艸……………二三六

鷓……………二三八

日ごと に……………二四〇

黄金向日葵……………二四一



一 姓……………二四二

青き花

青き花……………二四三

君……………二四五

桑名……………二四七

朝……………二五〇

紅玉……………二五二

海邊の墓……………二五五

渚の薔薇……………二五八

紐……………二六〇

晝……………二六二

夕……………二六四

羅曼底の瞳……………二六六

古酒

戀慕ながし……………二六七

煙艸……………二七〇

舗石……………二七三

驟雨前……………二七七

解纜……………二八二

日さかり……………二八五

軟風……………二九〇

大寺……………二九三

ひらめき……………二九六

立秋……………二九八



柑	子	.....	三三三				
族	情	.....	三三〇				
一	警	.....	三二八				
よ	ひ	や	み	.....	三二六		
わ	か	き	日	の	夢	.....	三二五
な	わ	す	れ	ぐ	さ	.....	三二四
か	へ	り	み	.....	三二三		
あ	か	き	木	の	實	.....	三二二
晚	秋	.....	三二〇				
凋	落	.....	三〇八				
砂	道	.....	三〇五				
微	笑	.....	三〇二				
玻	璃	.....	三〇〇				

邪宗門目次終

内	障	.....	三二九			
懶	き	島	.....	三三四		
灰	色	の	壁	.....	三三八	
失	く	し	つ	る	.....	三四九



裝 慎……………石井柏亭

「エツキスリブリス」及「幼兒殺殺」……………石井柏亭

挿畫「澆季」……………石井柏亭

挿畫「眞畫」……………山本 鼎

私信「四十一年七月廿一日便」……………太田正雄

挿畫「硝子吹く家」……………石井柏亭

屏繪及欄畫十葉……………石井柏亭

彫 版……………山本 鼎



初版邪宗門

明治四十二年三月 東京易風社版

裝幀石井柏亭氏

定價金壹圓 稅八錢

明治四十四年十一月二十日印  
明治四十四年十一月二十五日再版發行

邪宗門奧附

正價金八拾五錢

\*\*\*\*\*  
著作  
所有  
\*\*\*\*\*

著者 北原 白秋

發行者 西村 寅次郎

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

印刷者 橫田 五十吉

東京市神田區松下町七、八番地

發行所

東京市京橋區  
南傳馬町三丁目

東雲堂書店

電話京橋一六三九、振替東京五六一四



北原白秋著及畫

歌集

# 桐の花

來春出版

氏が歌の瀟洒にして清新の句ひ高きは恰もかの佛蘭西藝術のふつかしき手觸を思ひ起さしむ。而も此獨得の官能は繊細なる近代の感覺と相俟ちて、微かに草木昆蟲及移りゆく季節と心の息づかひをたづね、ある日の素朴なる情緒はやるせなき神經の顫へに交りて自ら歌本來の哀じき氣稟につかがる。されば外國人の感觸に吹き鳴らす日本の笛の音いろはかのかりそめの病に喫む古き三鞭酒の味よりかは新らしく、薄荷の歎きよりかは慎ましく爽かぶり。收むるに新聲三百餘首、單に自然の推移に任せて「春」「夏」「秋」「冬」「心」の五章とし、添ふるに「桐の花さかステラ」以下の「五五五」五篇を以てせり。加ふるにその裝幀の好もしさは更に歌集としての新記録を作らん。若しそれ眞の藝術的批判に到りてはたゞわが暮はとき高級の鑑賞家および近代のわかき人々に待つ。



北原白秋著及畫

# 思ひ出

(版四)

抒情小曲集

本文朱黒二度刷……小形四百二十頁  
挿畫ヤング七葉……定價金九十錢  
寫真版二葉……送費金八錢



Gonshon.

東京 東雲堂 版

父は金色の日本酒を造り、Tonka John (大きい坊つちやん) は幼にして和蘭陀訛の小歌を作れり。われらが『思ひ出』の家は悲しくもその根ざし深し。今や一家の離散に際し、茲に二十五年の過ぎし日を顧みて、あはれにもなかしき幼年の悲哀と、さだかからぬ性の秘密を味はむとす。この小冊子にはそのかみの若かりし母上と、わが愛する弟の Tonka John に献ぐるものなり。

『斷章』の六十一篇はわがわがき日の哀調にして『邪宗門』の強き色彩のかけに浮動する寂しきテレピン油の濁かり。悲しけれども棄てがたし。

「鷺鳥はガツガガツガと啼く」——その舶來のライダーの新らしき版畫のふつかしさよ。生れて南方の血脈をうけ、幼にして異國の趣味に慣れたる Tonka John はこの小冊子の装幀にも思出ふかき骨牌のクインを用ゐ、怪しき生贖取其他の漫畫を挿み、凡てを自らの意匠の儘に上梓したり。然れどもそれは自らの思を懐かしむ果敢なき一種の反抗にして、徒に新奇を衒ふ故にはあらず。

アボンザ

定價金二十五錢



毎月一回發行

北原白秋主幹 純文藝雜誌

句高き朱楽の實はその肌キメ細かにしてつややかに、その手觸また冷たくして、新らしき香ひ油のごとし。かの縁を帯びしオレンシ色のふつかしさはわが南方の夕日よりも光強く、淡紫の風味はかの紀州の密柑よりさらに床しく鮮かあり。葡葡牙語の Zambora 長崎訛のザボン、四國のシヤボ、みふ一にしてその句のフレッシェにして好もしきはわれらが近代の藝術と等しく、悲みまた相似たり。見よ、その實の熟れ輝くところ、黒猫は長き尾を曳きて「時」のごとくに過ぎゆき、海見ゆる庭園の食卓にはすでに晝間の紅茶薫れり。フォク取りナイフ取り、薄玻璃にリキユルの色をふがめ、アスパロガスに白きソースのかかしみを味ひ知るわれらが Intime なる Diner のちるるに、かの品よく、髪わけて佛蘭西の流行ふつかしく何時もかかる日の小歌を口ずさみつつあえかにも訪つれ來るは誰ぞや。

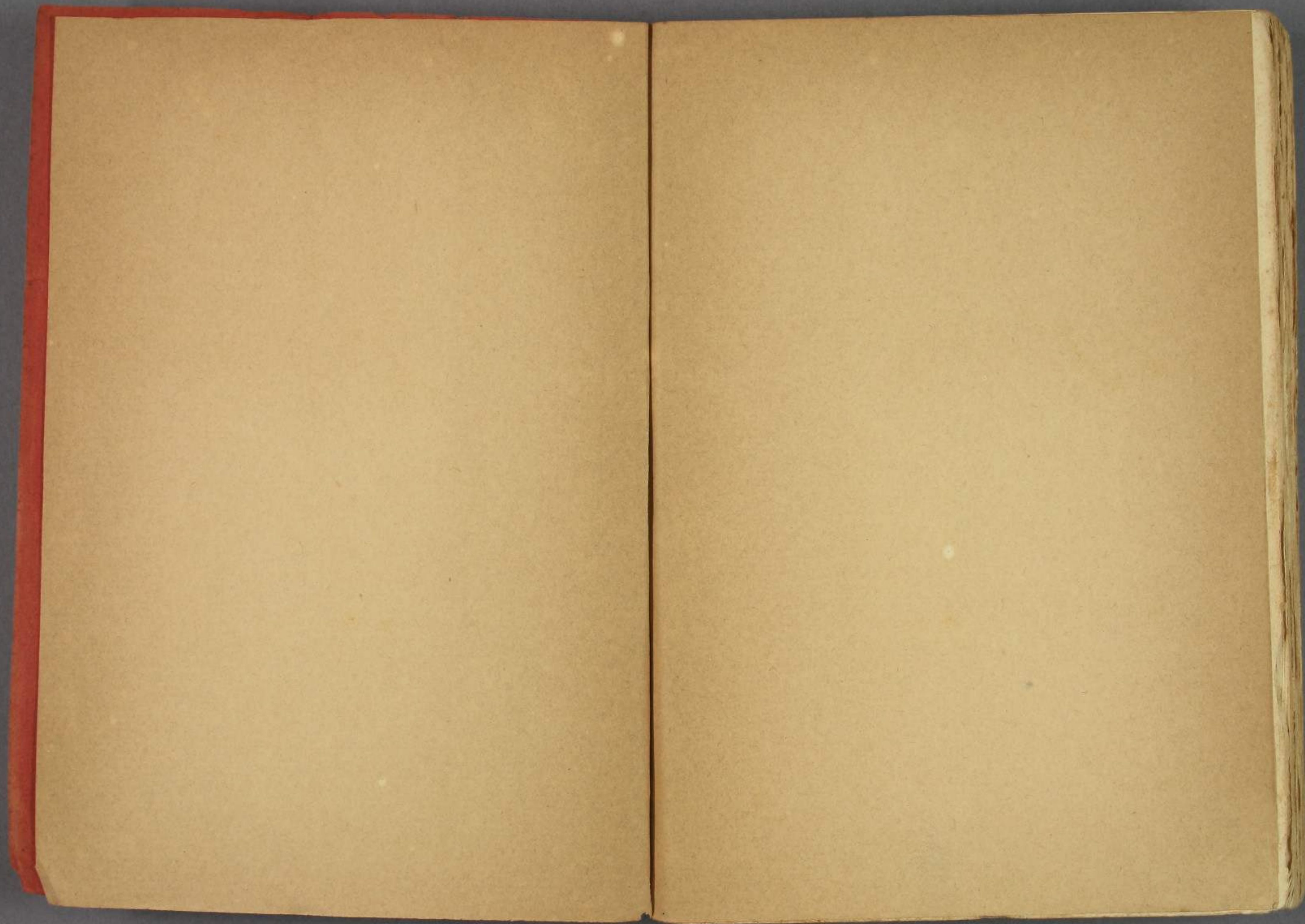


東京景物詩

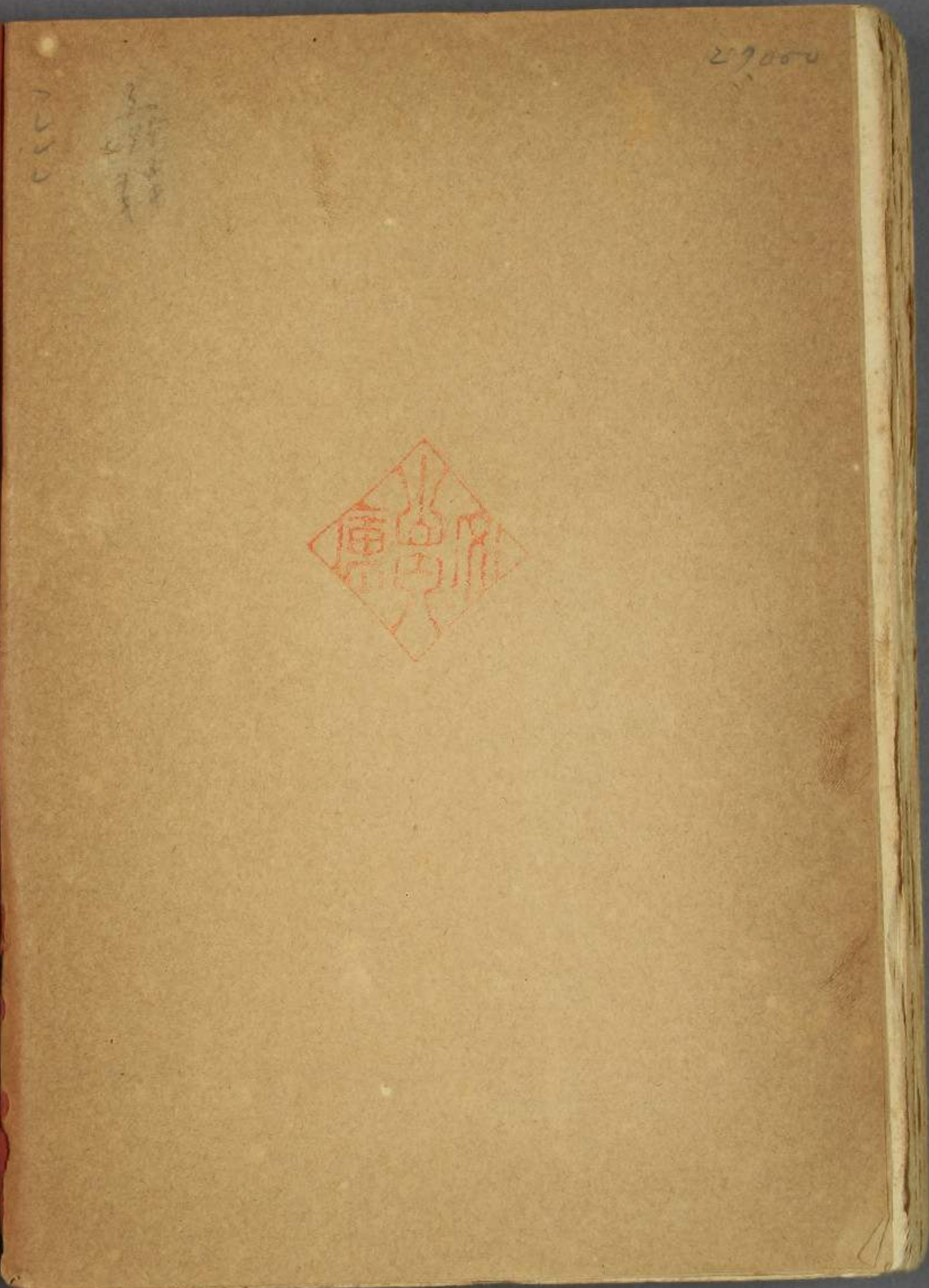
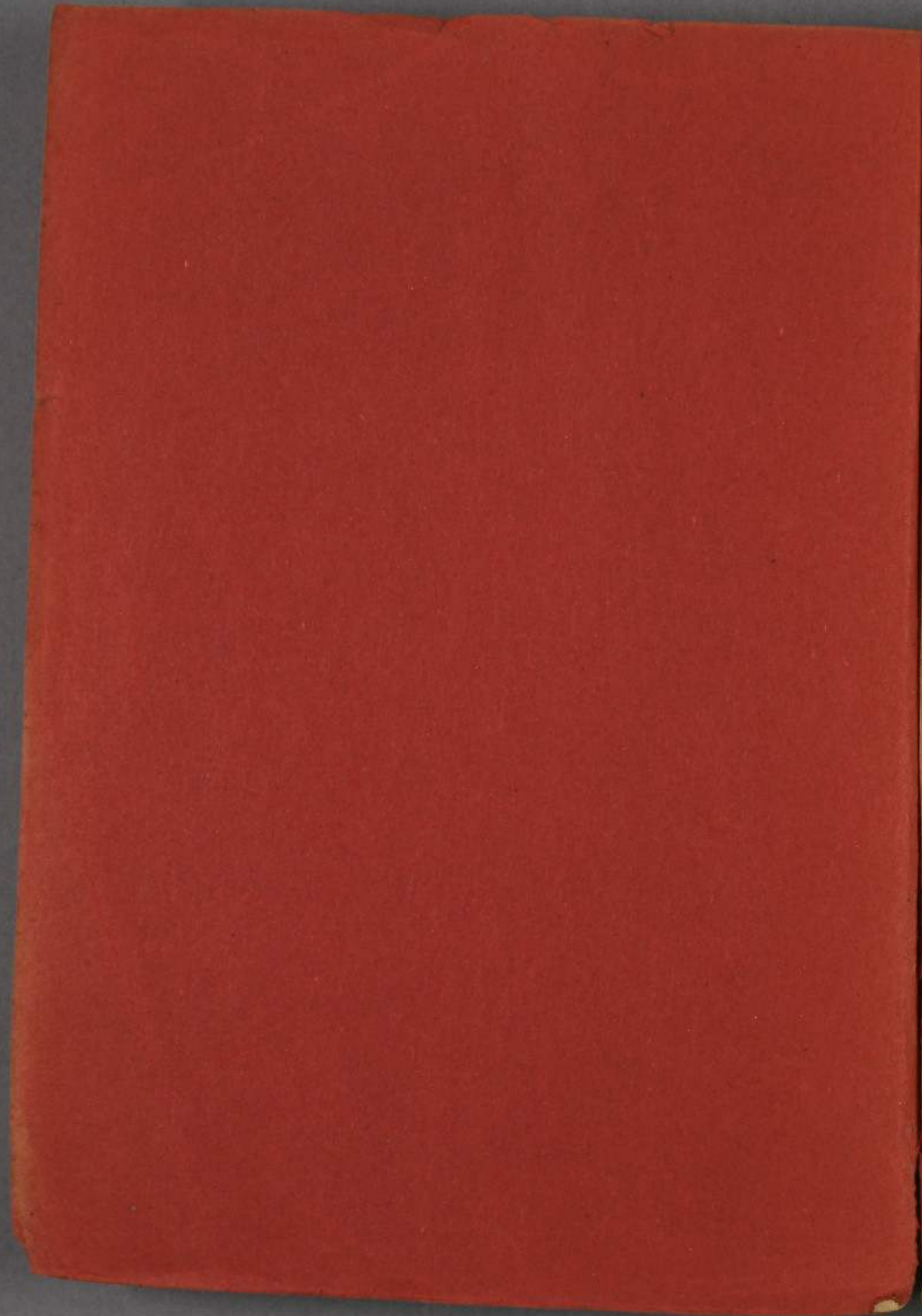
新詩集

近刊









Red diamond-shaped seal containing stylized Chinese characters, likely a library or collection stamp.

27000

Faint handwritten markings in the upper left corner.